八十番
全

孝経日注解

合

乾坤

越後國三島郡七日市山田邦市

[illegible]
[illegible]
海[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるは詩歌文質をとりの品歌
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政八年丙辰初冬

[illegible]
無尾山人

自序

[illegible]

一茶坊主話の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

耳近き言も耳解しを読本乃説
也けるを乃那にこ次まつや此句乃付く
語と句なら味なるは乃事ども多く人乃
心あるは菓律と夜千とは侍りて遠ふ字の
作者をも大方刈しに据えおくのこれを
落葉の松尾乃葉をば集めん菖乃打葉
乃那か紙のうき紀小冊子をはか拵ひ添ゆ
為なかれ我堅木に埋むるもうべの如し

あるは遠きといひしの書林某か那ふ
そのいつ遠きをあつめて又出しけるとて伝へ
梓木に彫てしりゆりせり公にも発辞
心あるはいとも伝へることの事まね
ゑんぞ浦のみとゝろ事まなびしし人の
見合す道をも少しあかし小さくもかき移し極めね
葉集遠きをとゝめ人見ゆかん者ふ心定
くらし起業をも何那へのきに申るし

のち熱てちと死にいたるにいたるも由
むかし法師をいれしも咄字古稀にあたり
不孝なりし其後乃みなる段安さ遂にすまし
己が心をたゞしうを正しまた経して其ことわりを
こゝろえ盛なれば法のあるものゝ浪迷乃
岸玉の(?)しれる禁ある急表山の安
ありし升六なる事なるべし

凡例

一 此書ハ予が門弟初心の輩に業おしへんとて新
出さんを法にかなふのみをもて千れなき一生
取りし文章なりけれは

一 文章の丁寧なるを正に編し やさしき
終とせり

一 当年中己が等んを志して住に 追而
あらんとは予が門弟のこれ小限りて 世にある
梓行すべきにあらねども

冬の日注解乾

浪花　黄華庵升六著

笠とる途の雨よあるところひ帝よ
ゆりくるたのしにとやとうう
住けるうるしの人家をかくるを
うるむ月入ゆるむ　狂言の才
古典をたうしるをふる
うひ出て中ゆるう

和尚ありし所行ゆよ何をうるに　芭蕉

此句貞享元年庚子の秋一説道うるの小を

ての噂しとて文拓風を吹えて須者ハ冬の日ならでハ
まとかりて飲器子翻しての発句く冬の日としハ上題号
も是より出たりと云此説ハ全く亦一説冬乃題目の起れ
くるし時眼を味ひ深ちあれハ是よりして此表題出たりと
あふるの語り謂へり蓋其の書題捜も是を向し註して
此眼ハ余情紙毫にあらす辞し冬の日と云題号もあれ
より出たりと有りられるの説ハいてハいてや見ん人をのん皇
但して用ゆへし此外にも数多解 何れも数ふ不及略す
予おもへらくさしたる去りしにはあるへからんや冬の日一
部の俳諧ハ皆すへて冬季の気ささる物をとりて冬の日
とハ題せるなるへし或人難して曰一部の題成用ゆる何
ぞさはかりなるをさるにかあらんや汝の説のことくならは

以の発句よりて冬日しとも題すへしあらすし又冬の此
三季にまうされハ其頃の句乃題といひかたく風情なかるへし
とりなら答曰是らハあらかしと云ハ冬一隅をのミいひて冬
の一躰にまうされ古き事も既題を一部の惣標とミえされや
例せハ妙法蓮華経にても是なるへしそのいふあるらしされハ冬
一躰にまうされ此一部の俳諧巻頭ハあらかし其次ハ初雪も
それ炭やり雲月雪くあらしとの冬題するものハそれらに
わたられ冬乃日と云ふてことくりて一部を通題とするなるに
題を一部の惣標として其言をとるへき何そ不足なる柱分
のことわりをとりて題とすしならんや亦冬の題目の想よりいて
たりといひハいかなくや考へし翁ハ怜悧謙退の人なり
然らハ自分の眼をとりて題とすしならんとハいかにてあるへくや

みくの日ゝ六公の論りて師和の髭ゝあれいを一生
の俳諧をなすゝ一紙一書ゝ一生を業ゝ一生をの日ゝ新ゝ
なり○句解此句ハゝ和名の原伯ひつゝ方孫すゝ
書の作ゝ句ゝ作ゝ句ゝ作ゝ和ゝて作り五ゝ竹笑の山墓
園の隠士にして聞ゝ人ゝ僕一人を伴ゝて西ゝを漂泊
し終ゝ小庵長久古庵ゝ居住ゝ医を業ゝ世
切り立ゝ少やゝ天下一庸醫竹斎と新ゝ和ゝ
狂歌扁舟も者婆も及ゝ狂歌ゝ病ゝ悪ゝ
作ゝ物語ゝ書ゝ○狂句二字の句ゝ或人の解ゝ曰狂句の二字を
句の外ゝて只風の方ゝ言ゝ俳ゝ人ゝ言ゝ句ゝ風調
言ゝ句ゝ初語の余ゝ句ゝ時代の風調ゝ狂句風の
と句を詩ゝと解ゝて若ゝの句をおれ

牡丹葉ゝ分出る小降の名残の月
ゝ我世ゝ引ゝて盟ゝ月を少ゝ外
手にとゝ涉ゝん須ゝ秋の雲

ゝ句ゝを引ゝて狂句の二字を句の人ゝ
解ゝ句ゝ此解用ひゝ引ゝの牡丹葉ゝ或い
ゝ世を形ゝ引ゝ手ゝ初語の余ゝ
ゝの全ゝ句の人ゝ用ゝ除ゝ句ゝ
此句ゝ狂句の二字を除ゝ一句ゝ風の
ゝ二字を句ゝ此二字を句ゝ
句の用ゝ此句小混ゝ詩ゝ
此ゝ風調ゝ夫を言ゝ
ゝ悪ゝ文字の余ゝ

五字の余りあるその筆で笑人々くし又蕉門七部撰り狂句
の二字或ル人多くの日一部の意味いかゞやと尋ねけるに答曰ㇾ古
今を古人々は文詞書ても狂言の才士と称されば何人もの
似せて作られる言葉なればこそいひてそのゝ外も狂句を
我も狂句をもつて風人ぶりやと云すてん謙退のこゝろにて
云ふなるべしといへり此解んぬかなし外々其句語をみるに
又それより来て人々もおのおの是をされとも古人の意は謙退
にて狂句の才士はいさゝかもしれぬりけるの発句を変
句とはいふ狂句とよむ謙退して己が宗と云る道を曲て
狂句と云けるに翁の心は変らずして元の言葉の風をたゞ正
風と申して云ふ言葉なるたゞ小謙退なれとして云に
を改めて後の謙る道理なる人ぞやなかるべし排狂句の二字

を並べてあるは詩格に狂詩あり歌には狂歌あれとも俳諧
連歌に狂句ありてやといふ事を論じて狂句士の竹斎を呼出し
て言葉小異して此発句の情を作るるて一句狂句ありしをと
れを狂句とは云まじきものなるべし是の道は是を放して書く
時は前も子細の作る事もしなれとも後書になる翁乃
ものの好くされとも狂句の二字は句をあるゝ狂句と云ふをも含
を引て書なりなれは書つけたるとの翁の好みにて後よ
狂句の二字を除て作るてもあらしとき是所傳記に翁の
後猶其門人等狂句の二字を除て案じ出したる作り七部
撰ても翁近化の後門人等狂句の二字を除て翁の意に出て是れ
又再びしとも先より尤なるべし後々我句中にも添へつけて
狂句たらしのと云ふ風にもいつはる本くらしにや古れ

[illegible]

[illegible]○次に芭蕉の[illegible]当時天下の作者奇を求めて
[illegible]芭蕉にたんものたのまれ[illegible]失ッて芭蕉の[illegible]
[illegible]業にたれとさまざまに故翁の生涯よ
芭蕉子ら[illegible]句[illegible]少[illegible]或人の説ッ芭蕉
の[illegible]の助詞ッて[illegible]と特ひのもく[illegible]の十体
を出して[illegible]の助と[illegible]
の詞[illegible]芭蕉
[illegible]一句[illegible]
義[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊賀より我[illegible]
芭蕉[illegible]小[illegible]の里[illegible]
句に[illegible]
[illegible]
下の句[illegible]
[illegible]
此句[illegible]
[illegible]
[illegible]
句を秋の水[illegible]
[illegible]芭蕉の[illegible]
[illegible]

なし是も声をこのむ所にあらすや　くさはその言味を
きらんと云へしあやしからく　云或ハたつと云流しものなるを
句に用ひられし杯と云ふて逃り観念の余りも少なかるす
光陰迅くも有しうつるを数息しるに云ふ手に旅茶の好
用をも志る人き浮世子か風雅あるの哉声に作くの
ゆへ了簡しぬる浮世の口伝之今翁の句抄てきん竹杖の
風雅も何るの笠を先述の為子信ひ弟子ニとまりく出
何しに云ふ有る風の方もしてうらを上に子遊ひなしく
外の少千何る弥我さへ何られありと彩色しあへるそ句
落葉しを惜子ともりてるとも外とりてるに糸巾　原伯乃
余りも先とも是もありと云郡しるひ　其に新見なきる
ゆへ子余りてとられにる外の用をも志るへし　蓮門の話なる

すや此句を浮世の手本とふすへきと

たくやとんしふくさの山茶花　野水

此猿或人の作を読ッやと去ふしすらくしとむありきを尤之など
しらるらむ此ハ水そうのうつるるやうに少しゆれハあるへし
さ作も都て句を吟するに濁りなさとのうり濁りを除く
とぬれとも濁りあるとの小一も濁り哉除く嘆する法やハ
なる既旧本子濁りを去読人なるハ此句のよふを紛らハしき故
あり来り作ハ為なりよけるとよむへし　扨句ニ云ふ発句
の作云ふ少子何ある人を読とうけし　岸子山茶花の新見なり
たるをうちみて去るよふく云ふ有し　弟子も深して去る作
風雅人ハ誰とりて猿ともけしれとも乳意の暁除之を
なれハ老人なと説述作を俗読子とも法く　京子氏とかく氏云

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

有明の[illegible]水[illegible]つ[illegible]　荷兮

[illegible]三[illegible]水[illegible]人偏[illegible]数白の竹[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]人偏[illegible]を非人偏[illegible]門の[illegible]

俳諧は故人[illegible]と看[illegible]古式を用[illegible]

[illegible]人偏[illegible]白[illegible]

[illegible]俳諧の式[illegible]

故人を用[illegible]舊門[illegible]

[illegible]傘を用[illegible]俳諧は故人[illegible]

他門[illegible]を用[illegible]

[illegible]俳[illegible]他の二門は[illegible]

非人偏[illegible]

勿論此第三[illegible]

[illegible]

さみんを求めんの秀説之用なくされ又の一説ニ有ハさ
月を詠むん計りの料くとをもおり此説程ニ字ゆれを求
理哉なきん落とられ月をとらすまき所ありもおられ
此有なるる水の名ニ斗ききしりよく承おしくれを
作者の掛合せて有なと云すかく此五文字無妙にして一句
なけもなくありし侍らく侍り性ニ第三と成るも有ぬの詞
よく居りるなく　附て云ハ芭蕉の山茶花の風狂人都の事
侍るに酒屋なるべし

かしらの露をゆするふおりかな　重五

此露をとて酒屋の旗をも行かとらて八作者の骨折
なるをと云し此るハ前句の酒屋ニ註発を附来りるに
さまく侍る嫁りふト云詞ニ発難を体めて人よく味ふへし

するくのすし家ニ故人の骨折り句に魂を入るるとも是れ
し其を赤ふるとなるハ前句のうつりにてなるも一句に
寂おり

朝鮮のほそり薄乃句ひなさ　杜國

是をとるの行北辺の薄を解するなとおれもさん昔學
酒屋おりなと場とありてわるりよるれ云ハ前句のくるの名ふ
とるを発めて其露の表あり薄と附くるゆゑのこにしらく
一句ニ場なるし朝鮮するれハ世の稀なると句ひなきハなく
なけなさと云ふ之旭小月ふ露白に色ニおふ都ふまて表くし

日のちりくニ野つり米を刈　正平

此句稲刈るニ手くき所を米を刈るを作りおるおもしろし
是れハきれの風調と米を刈るを一句持して作りるものなる

米をのへに敷きて刈りとり作りて秋に成りぬれば世もひまなく炎暑
あれども拳て益なし　繁きれば畠の畠一反附きに苗白の芝の小
ひろれども扱い秋に央るまでうとんで米を刈り附ける
ほうり落ちたるを動さんしてのちりくしに作るなり

わりて居い語ふやうにうんあるうまて　野水

世白居の苗をそなはりたるなりくにおもうるの森よりあるの
寂しき家小妙に不淨なりうるし　まを有んと作りるて
俗語の文章をうるなれば成るべきを語の森ようあるに
のうるふ作りて文章をうるに風情落し作るべきすま
をなるよ芝門とをうる俗言のうちも俗語に俗語平話を少
のこひをよんを以く俗語平話を正さんを考えるふ
をうる成事ひんたるうるの系のり成ることをうりうりて

風雅に文章のうるをとりうるをうる成るべきなりて読文
考の十論小文章を論して啓り乾坤の千米をうるもるこいふ
字のかりるしとして見ること百枚書遣るるも人のんの高動く
まきを成茅ヶ岳よりを思ひ出ひ井のよに小れもひやりて
とい人を動うんるの系のあやこ世茅も雲井も白の月ひう
やとをうるりやうのたやとをいひうのて刈文章をうるを
茅く蕉門の俗語に俗語よりを白乃文章いくひも
味わて　附をいく寂しきを居て住る人のはるくをる
まにたやたる破屋をうるまたけて聖つるのうきを脱
聖したるを附うり扱に白の学ずるいるに宋新る住
居せるるの多くに世の風人ずしを学ずるの俗語をんを
るの聖うの系刈るはるを人て学民の辛苦をうひやりて

日のちりぢりと夕陽と栄のうも仏もやつて化のしるる骨拔
痩き脇を吉野の風に吹れたる下の柱瓦とありていさつつ
そそ茶を吟じもよりて敬ひ〳〵る余をこゝろ引るものゝ
髮ちやすまま成き人のふ身のあと　芭蕉
此所とは白の石の面淨きを踏〳〵こゝて身を吉野の
ふるき寒さんの尾えと云よ作者こゝろを云へて寒て還
俗の体をひしきれうせんこみ変化の拙き実ふ化聖
〳〵　扨をを自の白うしてこの淋しき庵よさむ人と
こゝろ〳〵　白既我庵ハト呼けるを語物乃答を
こゝ　還俗ちんとする人ふ對して吾庵を西ふるふ歩
ふとしもの人をかくふ体ふして髮をあるを思いする
と所〳〵れるん吉のふ身のわび〳〵んこゝふるこゝ

いつりのはしとて乳を吉りすて　重五
髮を苔白の髮をかをを人ををとをんちして所〳〵りこの女い思
ひまふ〳〵ぬちく髮りこゝ〳〵人をまた女おりてこの姫を除く
〳〵おのれこゝ〳〵別むつみつ〳〵んふ却〳〵を男の為〳〵れ
ちて仲立する人扨よ偽りするをを誅ことをのして幸ニ
髮を蘇〳〵れをもの実い偽りしとをて今ハ口惜しとて乳を
もとりり拔〳〵ん吉〳〵い実の比丘尼の還俗ふい所〳〵ぬを
〳〵実の比丘尼をんて舊瓦の言を失ふ所れ〳〵
きこゝ〳〵ぬ〳〵〳〵〳〵すこ〳〵〳〵〳〵　荷兮
乳を吉りり拔〳〵〳〵〳〵〳〵り移よを失ひる人をんて所〳〵
白言ひ〳〵〳〵ひ〳〵ぬ卒殺ぬ所〳〵言原〳〵一語人を〳〵
殺すしもいふきをや

新法の時さむく咲ける　芭蕉

庵ちりの苔と附くれる沙くぬ孝新法はめとりふ苔よ梵ちる
ちりの行佛ちさみをも味ふ苔ーーこくの詞すくく
とのこ侵を白りを新法のくりり実よ盛ちり

ちるくーーひんふ半くるくーー　虚　家　杜國

叶白苔よ孤ーーこくの新こるる人の化国拓て世ちるふ
丞すくもちて九十九髪のこを拓を法ん科ち火茂梵
ちるれさちちれちーー

田中ちるこちんう拓落るくる　荷兮

こるこ舎釈の附く拓落ちんち白の苔ふりて小ちんう拓を
白作ちん田中ちるの手よこふ田中ちちと云詞こ三アヲ
及セハ十トちれりこふちんう拓ちを伊勢の山田のかとり深淵ちこ云

ふよちりと及ハ七絃搜ふ語りこ安を用ひた

雪ふちる引人をちんちこの　野水

拓ふ水辺を附く雪ちるちれよ永引人の待ン渡のちくん
ゆちふちり及二三白わちり流ちれを一白れちくく作り
ちちちん

たそちれを模よちるもる月ちたし　杜國

苔い伸ーー白こ模ふ晩ちふ月ち三日月ちくーー

隣きくーーちた所ちり作り居る　重五

きくーーちた強ーーきこサハヲ及セハサトちれちくく白ここちる所
武ちこ辻子ふ語ちこのくくく住居の函ちる体を月細ーーを云
ちりちひよちこ住住こ附くちり

二乃尼ふ近陶の花のはちりきく　野水

前句の町より居る人を学ぶ居る人をハ行ふ所とし文仕
掛する人の手を引て已ゝの者より立帰り居るをいわり居トハ云
なり京五日三日の時を乞掛て帰るをも下り居ト云ひ武州者
下り里なり所ゝ出入と云ふ同一所ゝ云ひおりんと
ゝも俳位をすゝをゝるを院井の君と称ス　なるゝのなり
附ゝを所ゝなり居ゝゝ人を俳所つゝゝ掛ゝゝ人ゝゝ
ゝ人情を附ゝゝ二の座を一箱二箱とゝゝゝ　その座ゝ
なの九ゝ下り居位ゝの俳ゝ　さを弱ゝ詩ゝて高位人のむし
を語り出ゝ　近衛の花乃葉ゝいゝゝゝおのれ高位の形
ゝしも花人の俳遊掛いゝゝゝまゝゝゝゝゝ今ゝ俳ゝ
娯楽の若ゝゝゝ人位ゝゝ掛欲ゝゝゝゝさゝ余ゝ白
ゝ下語ゝゝのゝゝしゝゝゝ例一世ゝゝゝし

悩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　芭蕉

句を或人の語ゝ句決ゝゝ人を若句の若さゝゝゝ
人ゝゝゝゝ才を悩ゝ雑ゝ嘲ゝての附ゝゝゝゝ
等の句例ハ

八ゝゝ山吹ゝゝ二十ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ　挑ゝゝ　時

掛ゝ引ゝ語ゝゝ句解ゝゝゝゝゝゝ若句の人ゝゝ
失ゝ歩越ゝゝゝ所ゝ掛ゝ居ゝ人ゝ句一ゝゝゝ
ゝゝゝゝ所ゝ人ゝゝ悩ゝ雑ゝ若ゝゝゝ
ゝゝ若句ゝ問若の附ゝ此掛ゝゝ所ゝゝ原氏の末
掛若の世ゝゝゝゝ俳諧座掛ゝ時ゝゝの句ゝ
ゝゝ人命帰俳生の歩ゝゝ遠ゝゝ身ゝ遠ゝ俳居ゝ

葉も芽ぶきそめぬるこの世を面白くなりぬるに
附きたい芽白乃人の所為にて芽ぐみ芽ぐみ芽ぐみ
くさぐさに成るを面白くなりぬるに
の所為にて芽ぐみ芽ぐみ芽ぐみて芽出しを
葉ぶくなりぬるに成て遠ハ法にて沙弥ども
人をもて五色の袈裟の袈裟を世の業成
して原氏ぶ泉彦ぶ称ぶ

のり新ぶ篠屋遠新おおろぶ　重五

芽ぶく前白の人すてぶ人の位を定めて除ハ葉ぶ
祖のぶぶぬぶを上箔の所為にて附ぶ篠屋す
ぶふぶ人抜をも考へ新ぶる沙弥法師を
白をたへん

今ぶみの矢成ぶぶ声　荷兮

芽白篠ぶ新おぶるぶの会侍を多咎めて此作者
ぶ一曲をぶふまて抜をぶすぶ何ぶ人所ぶん
所ぶ作ぶ　ぶ芽ぶの変化を扱ひて秦の
孫遠ぶ考の他を報ん為ぶ　篠を新ぶ
つけ殺ひ　ぶ或ハ韓信ぶまれぶる使者
の木ぶれよ再び展て秦の始皇ぶ車ぶ鉄槌をぶ
系伊ぶも地向をぶ　芽白新物の中ぶる人の所ぶて
篠ぶ　ぶふぶ密ぶ恐ひ　ぶ世ぶの所ぶ
今ぶみの矢を放つハ作ぶん此白ぶ一枝の業を
引ぶ方作者の働ぶ
用ぶ

ぬきとくんの記念の杯乃吹あれて　芭蕉

矢を放つとそより吹れて　芭蕉

せきとめし人の記念の杯をそそぐの系氣みして二句の

うつりをもくみまくきく

きさらぎ宗祇の名をつけし水　杜國

名をきよ白のきけしきを静乃に扱ひしを無坂乃猪

無拍子美濃乃国宗祇の水も同じ乃九もの清

き無坂乃物乃杯と風流なる宗祇の古れ水との對句なる

へし宗祇乃水れ美濃乃国名所山田名所川のかより

ふるりト七夕樓うちより故ようれよ讓りて略を　扱は句の

堂乃千乃乃を孔子乃乃乃より逝者乃かくのごとき乃を捨

すてるに基し墓悪の無扱も風流の宗祇も今いて

名のうくと生者必滅の理をはとしう作者のうまくこそ

扱ひしそれ

笠程なしこそ程りもぬるし小　芳角　荷兮

はは白い宗祇の三水をもてふ乃枕扱をうひしをし附くこん

ちに小しれん来ものの白紙りこ笠程てよ宗祇の白り

世の中をきこふ小しれの乃ちれ扱と中乃れいをよ風流を

乃しして乃程乃乃流をんとかをうて

名をうをとうをしひとり唐苣　野水

名い乃乃乃をうちうをして乃程乃乃流をんとうを作よ

名をれの中よひとり唐苣のきくと眼をちをを白の

うちとして附くり扱場の論よりりていお戯の宗祇水

ちちくは人の杯よ射して嗤の白をれいは唐苣よ生論い

なかりしや初への患ひもなかんずんとつてそのてらで侍り

しらじらと碎けしハ人の骨か何　杜國

冬かれるよりかゝるの汚し乾を附より

烏賊ハゑびすの國のうらかた　重五

ちうは花白しらじらと碎けしハ人の骨か何とはふるをいく
夜も嘆しらしてて人れは曬骨累々として数も限りなき
なまさ数り知るさよりなるとなれは定めて古戰場なりと
見付るなるべし　古文古戰場賦ニ浩々乎平砂無垠敻不見
人推あつて東西のさかひもなく果もしれさる所さかりなに
出て人の骨しもなくまれは行さきさしなかよ千さうはく
なくて只忙然としていかんともせんすべなくたゞ揺を見さなり
一ていさ悩ミなる旅人の体を附るなり　花白の骨を何と

此句の疑ひハ人の骨なるべきんとハいかの甲にもや烏賊なるハ胡國の占と
ゑびすの國なくてしいそ今の用にやハ立べし扨いかなる
何をとらもさ定めん探路まちすなはち未きめにもなりく
評判しておくさなる体なるべし　占のなす素盞鳥
尊我国を棄りんとして小壖耶那祇一千を引率して
大和国内に到子一千の刀を椎として竈まとめ天照太神
を取りていてよしなきさるなにもさらしりん八方の神達
を引出してかくさきや天の岩戸にしとまえにたる時世界暗
く光明とありて月日の光りなくまれはなさ路根吾をと
嶺さきさ香久山の鹿乃肩骨を積きいたりくはるくしとらせ
さまさ合歓木を焼て鹿の骨乃割さまをもてうらくさなり
物ありは禱をりけて諷しるかて出すせるべしとなり

香久山の茅ふもとの下にて解て肩抜麻ち書なる事をしる
亀トといふありき亀の甲をやきし裏よりさけつけ
ひゞ破の三ツある離の卦震の卦ありと易道に
出て見るといふ事をいふなる亀乃ト卦子とくち
いたぬも亀乃甲の行衛のかたきのなれは鳥
綫ならひすの国のことをいふとも宜しかれ
本ちゆさの謎ともいけし　郭公　野水
是占ト謎トの對句なるへし付こゝは其のむかし己を謎
取りて執なりし日待を庚申まちなどの戯に取て付
たらん
秋なれ一斗とよむつくす夜哉　芭蕉
これ酒剣と其句を謎ものゝかたり取乃撫遁とらんと秋

其の付句をば付るまゝを書き栽して云ほしくて秋水一斗
といふも乎摘たりしも杯閑にみやくさ毎一斗の雫あり
たりくとみやてる手書なともいふりなまとさ曲節乃手なと
とも紅撥もいへり
日東の李白が坊に月をなみて　重五
秋水一斗といへる漢語の雲起子日東の李白とつけて
詩人をみたひよせたり日東なる李白が俳諧を好みし
南郭詩集に日本をさり東と書るあり是を戯説に
石川丈山をさして云へとも云たるかくれ名を伝ぬるの子名を定
むる時さたむ様にてなしかくれたる李白なるかてよむ詩の好キ
人ありとみえたし
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

されは芭蕉の李白か坊に月見しける人を倂する儒家詩人
なりといへは聞かうち延し　其供なる人の世に多かりしは此李白か
ことを詩人の庭に招かる人ゆへ亦其坊に來りて月見る明
友も其弟なる人なりしとその人の形容を云ふて巾に
木槿とハ作りなりて志つか文槿花一日栄といへと木槿を
照らし巾にさしたるさむらひ人の事なる事をたとへてきし　服に
笠に山茶花とりかたに事に巾に木槿のいかにもを雛に
まさるを猿の山茶花には音を好みてさし狭くかなしいよりは高き
すみこそなしの吹花し笠に散りもてくるなれ此木槿に
混して論ずべからず

うしの跡とふらぬ草の夕くれに　芭蕉

此句或人の解に古言に大人をうしといふにより是を大人の
事として琵琶法師の事に取りて琵琶法師の古集りにて付る
ことのくさに一説ありて用ひゆきしかれど牛を仮名にて書たる
哉幸ありて芭蕉の牛の字に大きなる意あり大人とも已か猪子に作
せて解するものならしとも又大人の弔ふにはせ
乃夕くれの草の一字納まりて芭蕉白は琵琶法師の職人なり
史を琵琶法師といへるに見ていへるにやいかならん
されは芭蕉の琵琶うち巾に木槿を挿みて深雪乃
留まれるやまひたる気色一曲ひける美人なれはいはゆる
牡丹は老人の風流にも似ることのかく牛の跡きを見えし
て意をこめて意に趣向をとりなして牛とハ併せん
みえ牛さくいかにたるれ夕への露となろひ失ふとハ例の
翁のこの好キ小して木槿の句ひかりあきれたる事とハ白他

ちんうしまの多くれこうふ牛を葬りてこれを埋しの住し
さ杜侍りて一叶ふ物の杜えの杜しきかりや熟向
をこをあけこれこうしこれ 亦大和物語に南院の宮安牛を
借りて坐りて又の日かりにやりこれいこ牛死ぬきこれ
我家しるをうしこれ沙汰ぬ坐をよ陸こ者の命下を
かるるかりやこを今こ死こ

箕ふ鼎乃魚 成いこ 歌 杜國

此白ちこの人乃毎ふ牛弔ふかりを鬻きあく奥高人
ここりこれのこをてをよ附のここ引しこふ坐をよ
いこ一ト古れい変して高人の家乃伝ハんこ此ふ
んを用ひく解かりきこるにしてをこくこ安高人
乃ふ毎ふこふ引しこをひ高こ附り 平こる

こせ乃平うの苦しう祓をしもあつ乃のこよ左
迂しこいここ乃のよして附りて上総房州の浦こう去る
ここ乃後人こ乃借こ乃施すこをがこくこて斉
こふ陸沖ふ生奚をこん借こすここ乃これをみ乃く
向丸米をこ浦の市祓ふ出していこくこの代ふ移して所化
乃ふ鞋こいるこふ亦こ院堂舎の借これをもこをこ乃
ふて奚ふ戒名祓記して布施ここ乃ここ生わこ
の寺院ふこ門乃塀或こを梁祓ふ去汀して亦こ乃ここの
汀ふ彼生奚ふ戒名こ乃こここ乃こ乃こ乃こ乃を生ふ乃こ乃
まく者ここんこ乃こ乃こ者こ乃こ乃こ乃こ乃こ乃こ乃
祓こをこをここを解すふ乃白の牛の弔こ乃こを浦
ここの辻堂祓ふて郷中の牛乃拯腔祓ふて乃こここ乃失せ

[illegible]年忌抑の弔ひなる人[illegible]わりの後人[illegible]のた
[illegible]ひ[illegible]供佛施僧の営[illegible]を附[illegible]
抑[illegible]牛[illegible]
[illegible]実[illegible]中[illegible]
近藤泰山公[illegible]木幡の[illegible]牛[illegible]病
つ[illegible]
き[illegible]
[illegible]氏神抑の[illegible]祀[illegible]
[illegible]抑の[illegible]小き社[illegible]
[illegible]
納[illegible]抑の神[illegible]
[illegible]

翌日[illegible]牛[illegible]起[illegible]
世[illegible]牛の年四[illegible]供[illegible]の体を附[illegible]
う

つういのうと[illegible]年[illegible]　荷兮

[illegible]詞を[illegible]答[illegible]女の物[illegible]
[illegible]
[illegible]業[illegible]
[illegible]小京女八[illegible]
[illegible]作[illegible]押出[illegible]
女[illegible]附[illegible]　此[illegible]をコノシロト云ひ[illegible]の[illegible]類[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆを姫よ告るよいうるゆゑ姫堕ちまりくれを身後の
さらくしゆちの咎ノをおそれ身姫をと死失ちうとして棺を
作りを中よ経をいれて那辺よ送り一時の煙りとゆ
ゆ人技くゆりひきをれい国中誠ちうとおゆ〜て止み
ゆをコノシロちくるとをてコノシロハゆ代乃主
ちうゆ室八島縁記有古ゆよ下野ヤ宮の八幡四よちつ物語ゆ
るの代よ経情ちん或人経して曰くくとちつよ女と附ちる
きもちるくしまをゆをれるとハいく附ちるくきるの代ゆ
ゆ詞の孫よをれるゆ附くゆをよいてく奥いゆをれるゆ
神の生贄ちんちるゆ〜ゆをも抜ゆ乃れをも祭ゆ長
勝ちゆ

ゆかいもとのまゆちをゆゆ　野水

或人の解よ古ゆの女乃妹ゆ姉いゆををゆんをを天よ初て笄を
結ゆゆ妹ちきをゆ新ゆもちて眉ちきよゆゆと附ちるくと
いちりをゆもちくゆ一ゆよ解ゆ侍ちるゆ妻ゆちいちゆと
なるゆノ一字一向よ解ゆ侍ちぬく此附ちを姉も妹も甲〜御度よ
文仕して居る体ちゆれゆゆも姉ち年も十八九才ゆく
いと小さくしくあれ老の御程を才て乃ヤ〜て妹の寵を
奪んとちをれるに妹ち年も十四五才ゆていまち世ちを
居くゆをちく眉書ゆゆきとく抜ちゆいとゆ答ちるいちる
御度抜ゆゆ新ゆて非菱岡書の有ものちれゆ妹いを
乃の岡書ゆて眉書よゆくを姉のんよちゆち妹の眉書
よゆ乃ト乃ゆを附ちるく此二ゆの悪表ゆ伝ゆちく

錢ひとく房陽子志賀の花擂て　杜國

眉書にゆくさもふより湯屋と附て叔眉作りたる地下平人
の業なれはことに横の幕を引出してさゝ波や志賀
乃花ぞんけてふをきりてかりしろくとしてかのかみ
錢りうかるにそゝふひらるさまを見んるとし

廊下は藤のうけつゝかゝなり　重五

廊下のきさに藤の花をかくしひてまとを飾つゝふと作り
出る夜のりのゆかりやうなる風情にして月出し　挙白の
挙白は頌の意にたとへ追善の席なりとも挙白は祝ふ言ふ
するとのおもひしを作　其しれ称名院殿二七日の追善に紹巴
独唱をして自らの花乃座にてさまを歩る消ゆ年月
月に添ひて挙白　今ふかるのくく紅葉ふとさゝれしを
新てかるきのをふるても見限りふて仕舞ことするはよまかる
瑳らく茶屋の手花を仕舞ひても季の様相にモフたるく
さてトりふさかられ先ッさるかなト詠くのこれやうかいふかな見
とりせつるを

おもしろきも壮年いまうさきかなを

据たる

をれ雲の立しも袴きるくしうる乾　野水

花ちのそく振衣千仭岡濯足萬里流とるひのおもに秋
津洲の山くを経めくる名跡古迹を遍歴して泉水石を
前に泊まりにけ入月りて雲ゆく経懐を述て生涯を楽

[illegible]五斗米の[illegible]を傳[illegible]
今[illegible]を[illegible]れ官[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]白は切字の[illegible]
[illegible]切字[illegible]
[illegible]切字の入[illegible]を押て切字を[illegible]
[illegible]
[illegible]切字の口傳を[illegible]
[illegible]式に切字の[illegible]は初[illegible]を助[illegible]
[illegible]傳授[illegible]
の一氣の動き出[illegible]陰陽の[illegible]白[illegible]
切字を用[illegible]物二ツと[illegible]

[illegible]切字を用[illegible]は物[illegible]
[illegible]白の[illegible]切字を用[illegible]白[illegible]
[illegible]又[illegible]
[illegible]白の[illegible]人
[illegible]初[illegible]
[illegible]切字を用[illegible]
[illegible]切字を用[illegible]
[illegible]切字の[illegible]
惟然曰切は第七竹は第[illegible]
[illegible]亦曰切字は[illegible]
[illegible]
[illegible]切字は[illegible]
[illegible]切字[illegible]
支[illegible]の別[illegible]切字を[illegible]

熊〻切字を入さるを　秋風よりおちくる紅き葉の枝　素
白い杉食嵐葉の近時の白と赤　菊帰りなりけれ
塚乃すゝこれるまよ　白い出月の呂丸の橋中ゆ死る我
時ある白と解よ当時ゆ菊ゆ帰るこの主りて古園
るも帰るんるを待ちを多も帰るんるひるんゆ行者
塚よすあるるゆ白鎖りゆして帰るとの語新るり
るれよ切字を用ひさるゆ世の孫るれるとを
切さるゆ板筋の徴とこ性ゆ切字なりるも平白ゆるなり
泉帝を府よ光ゆ女ゆ　光ゆ平白と名月や竹ゆきさる
村在其角　白ゆ始ゆ名月をとして附白るりしゆ角光ゆ
変白ゆるるゝ〻として切字を入れて名月やと光ゆ実よ熊キ
変白るるゆ刈稲編縦集二五つるるゆ景ゆ杉風

仙化名月を牛ゆ　村屋光るゆ附白るれるも一雑
白の生れる変白と赤変白るれるも一雑白生れる白るる
あり生生れの平白るるるのるゆ白ゆ切字を入るるる
変白るゆるるゆ〇切字の口伝　切字のるゆ一白性よ変白
るるるるれゆ切字ゆるるるるるも口伝　切字るるるるも
変白るるものゆ変白と切字なりるも平白るるるるゆ平白るり
平変切字と云り赤ゆ初んの惑ひと成と字ゆいるゆ口
切と文字るるるもゆ切るるるゆ附ゆ切るるるゆ文字
を乃るる成切字るれるれゆ成月曰いろはにほへと十八字切字るる
るも中されるり赤切字性よなりるもんの切ゆ変白あ
まるなりるるるゆ一白の位るるるゆ変白るる
るるれゆ切字の有る世ゆを指るるまるるるを連句

本式傳ニ切字ヲ格字ト云ハ切字の字きれ方ハ切字ハ發句の格ヲ外ハ必ず切字ヲ用ひきれ發句ハ不句の字ハ能く其切字ヲ用ひきれ格ヲ中ヨ居ル狹ク格外ハ廣ク

雲ハ月ニ乗テ人ハ葬　乃　食　杜國

發句蔡世を廢るまねハ是ハんを寸法ハ三尺余ハ

をうて招ヒ来ル乳ハ乳のあるくと書ヨ弥生ヲ成あ

ゝ月よ笑ひゆるゝん乳ハの食ハ仕官の暇ヲ求ム朝

霞もゆゝ千ゝて葬ヲ哭ヲ人ヲ食ハ人ヲ

ゝ白作の手書ヲ人ヲ

葬ヲ糸ハ乳ハ　哭ハ男ヲ邪　翁　叶白ハ乳角ヲ大

酒ハ霞をいゝ乳ハ白ヲ月ヲ乳ハの乳ハ

ゝ合ヲ

那須にまて行る楪の羽あれて　芭蕉

叶ヲ乳ハ楪ハ前白

雲ハ乳ハ白ヲ秋乃体ヲ季ヲ乃所ヲ

ヲ一白の味ハ楪ハ芭蕉の初め

ヲ出ヲ枯る悔乃千歳まて楪ヲ

楪乃あゝ乳ハ楪ヲ野

葉まて行ヲ月ヲ

ヲ

ゝ月ヲ乳ハ　荷兮

四白目ヲ一時て佛幸車と併ヲ芳白の楪ハ

たゝうの乃るまゝ　をき場を除仲の里ともあり　ひよ
ちゝゝん　彩ふ　れとハ　時　る　り　白　ゝ　ふ　宮
時　遊　を　九　主　の　玉　乃　事　ゝ　も　ま　除　さ　邪　辺　の　ち　ゝ
ゝ　を　を　て　ま　ゝ　る　時　幸　ち　れ　ち　ま　れ　ち　ま　ま　ち　ま　を
ま　ゝ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
幸　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

麻呂の月　袖の絹鼓をゝ　重五

芳白の車　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

遊　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

遊　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

絹鼓　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ

[illegible]
桃花を手折りて[illegible]
仙の[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとる風雅乃至の出来ぬれば家ハ作りてんとうに
桃花を手折りて植ゑもさすらんを桃を
神仙の求る霞をものにして三千代まうもいふ
望を有のうへ一夜徳乃出寿ちうちうさは作ちを
一世界を費八十有余歳を持ちて絶きれる事
ちうふ風雅ちうふ家の祖ちうとれたるふうとて辞世
家ちいのちうふうちうの五ちけ歳ちひうけぬ沖
詩ちうちう舞 茶吟茶 承應二年没春秋八十三才

田螺の陸奥の田螺ちうとて 杜國

ちうを家ちうちうちう後香の沼乃田螺をとりよちて庭
際の泉ちう放ち茶奏の体を作ちうふうとのすさ
を平生ちうちうちうて井手の蛙をちうちうとちうふを

蛍蛍乃虫をとりちうちうの数ちうちうちうちう
へてハ摘磨ちうちうふ用ひ捨ちうちうふ殘ちうの
ちうちう砂を掘て捨ちうと持を縄徒をちうちう強く
持ちうの名をちうちうて用ひちうちうちうちうて價
の高下をちうちうて活ちうの市街ちうちうちうん大坂な
て田を捨と移ちうふうちうちうふ全くちうちうちう
かちうちうちうちう

奥のきさらぎを たくちうさふ 注 野水

夜ちう田際をちうちう世ちうちうちうちうを作ちうちうをさ
ちうちうのさちうさて活くちうちう欲くちうちうちうむちうを
今の後へやちう乃彼ちうちうちうて衣をちうの科ちうを
ひちうくの布のちうちうちうて移ちうを乃公乃叶代ちうを

作りたる二百年ばかりのものとき作り
なれば委しくいきぬさまなるの奥儀抄に曰正月を
乃ちのちのしを此月はえうりて衣を更きる
ちろふてきさまなれとうかりさほひめの命を高
乃こまぬさまなれたるさまなりけを此月をうる

床みく語をいひてうる男　荷兮

附をを芳白のちく注ふ人を女とえく注ふん
変化成扱ひて高を附うるの女を江戸乃吉原を
とに勤する俳諧とんく有つのむしをあるひ出
し曲輪つくんとうさ此をを注ちんとうり白えい
田をうのあるりをくく宵のあるのうをひふさみく
とうちるあれ移やふけ人静まりてうるみて

うるの高をうちたるの男乃国をうをを少
つをうくくをうちうくれい実を後弟の男ふてをうり
うるしいをうし

孫さをけのうるのうるし　芭蕉

此意の附をを志ちうるし立を国ふく謎をうる此し
除く芳うるうをを公出うをを宵のすの好ふい案の
弟ふて孫の妨ををうるを子耶一後の場を数形て附
らうるう翁の附白ふい新て此扱ちをとうり待猿蓑集
附金ふ　約束の小多一さけ高ふるく　馬莫　十空八う
の余ふくもうを　里圃　此附をて約束の小多るれらく
ををて来りつるを注もく附付をんふるうきふく
をきをうるうの孫扱あく今余ふ出をうるふを

おもしろく古今の物好きなる人しるしをもとめて
きた田舎の老ひ人〻傾城賣女とありけるを忘れ
ることのなりしかた今は老の志と申てうゐ忘面を
赤めいろ恨こ雪の哉り杉山のほうけ〻志の約束
をもたりして果い者の書ともるなく拾ひ集り
つるふ今い無もさめ呆ぬ世さ寄て縁の妨ケ
こいろるるよ恨ぬりしるの作ることし女人偏自
他の論ふ多りてい歩誠しのこ注よまくい自他差左ふ
しして居れも亦外ちもこ注こ人坐ることし
歩誠い田際をこて すきこ人こ恋のこ花い自
ふして亦の白し他こ注こ人ありこ注こ

口あこ猫をちきる地こるよ　野水

白い孫妨こ注ふ白病たるる人ふ踏ひれうこ注ひて
こ注病をちきるよい附こんふ白病をちきるい口人ふ
歩誠の白ふ三白一ここ注こ注ふ歩こ注
誠こ注者の男こ他をこ注こ注ふ歩
病をちきるい自の白ふして白他の注ふ白こ注こ
を通こ注

ひこ注こ注ふ首送りきん　重五

白附い一特して歩死きんこ注ふ男者の注こ注附こ注
附こ注い注体中ふ大特こ注ふ人の一我ようふ原て望乃
軍を必定歩死こ注こ注悪を極メこ注い白こ注敵の手ふ
注ふんこ注ふよつけてこ注ふ紀こ注ふ死者の人こ注ふ紀こ注ふ刻
注ふ大こ注ふ病の者ふ敵方の喰りをいこ注ふ出こ注ふ

能大物の死骸の人苦しめるれば生臭氣を厭さんかたのふ
既に蕉翁を悼まるる例もなかりしに我腐の骨くく
骨ばかりに附まとんに此附歩死のいまはきに小腐をおし
く拭ひしれいに異なり

小三吉に盃とくせひんかしし　芭蕉

芭蕉代の白ゐして芭蕉せんとかりし宗祇の酒をうしく
附まり小三吉とハ後吉まに附きるくきかくしれに炭俵に坊主に
ちれとかりに仕ほにとにゐにゐにひとつくしひとハ
戦場より向かて分をとるく勇者岩ゐてとる動せるに
ゐをとるくしに芭ハ大園記の紫因の歩死ゐに平記の村上
義弘の討死の伊勢ゐにひ合せんもとるくしに

月を逃てうれ牡丹ぬすむ　人　杜國

芭ゐハ芭化をかりて風雅なる俳を附まり芭白酒香て
うしひ居るさまをうれに代の牡丹を盗ふゐゆふゐに
て五三秘蔵の牡丹を人ゐ盗まをてまをたのしむ遨遊の
俳をとるの好玉雅興なるくしさに月に逃るくしに附
なるんに化の白ゐして酒香るくに人を待くしに附
ゐるくし

縄あくにかりハ花ゐれ百ゐるく　重五

芭ハくく牡丹の傷を附まるるくし古文愛蓮說ゐ牡丹
花之富貴者也とるくり牡丹を富貴ゐるのに謂れに牡丹
の傷るに生度玉楼に作らんゐ文に俗の千眼一統を
作に芭ゐに行くく家を引ひまるくり彩に俗謂のにゐる
さを世の中の芭化にとるくし

ちりくるこの世花ざかり切　所　荷兮

苔白の壁高く垣破れ古住居ひしき所もつれ小石原の
さゆかりしくちりくるふよこを思しさ紙もんろ(きも)

初霜の世にや嫁のいろ名しるし　杜國

霜ふる世界切所を通る人を附て夫の中も霜姿の
眼ふるるこのをる人出して附ける例きひきを集小八
辻小袖訪の涌陽の中小ろる霜の辻の中小眼ふるも
のを一人ふ人ふ中小も世のうれ山伏と為附れ
ふる小笠しうるし　初花の世ハをきろる嫁しつき
たる女ふして五月雨の衣ハ霜の笠やろるをいうめしくよ
いふるるし白ふ人むるけ小袴ひ飾りておのを盛
をふ人り振舞ひきこのくとり花を風しるし

うふ袴いろろ乃ふ変そろい中変　野水

附ふこい金小の焼のおふ小ふ嫁ふろいろ名しさ
ふ焼もいろの夫をうさ小ふ小なのふ嫁ふ小ふりて人
小ふ中ふ中ふんふ子をふ小袴ふろいさもなりふんふ
遠き月りふるし古ふ小ふ　這人ふたて小歩めふ子を
ふ小ふ中ふ小袴ふろ者をふ子ふ小ふ柔ハ小女の恵ふ
　梯ふふに餅すゆる袴小ふのふ　荷兮

柔ふふふり傾城の恵ふ附ふり梯角鏡ふ小ふ人て女の
中ふ恵ふ小ふ小傾城ふ女ハ袴ふふ小袴ふふ小ふきふの小ふ
ふりくし　什白の裳ふふ小ふ裳の袴ひふ小ふふ小ふ袴て
裳小ふれふ中ふに眠ふ小ふ小ふ小ふりふ中ふ小ふ作者を
月ゆくふるゆふて什白ハ正月も元日ふ二日ハ袴小ふて小の

かうとうの水鳥のうるほさを乞ふ一白すいこと
して誠に五尺のあやめ水なるきるること

ふるさと起こす氏帰燭とかしこく　芭蕉

芋の葉白の国の飼ふと附ふるこ孤帽とりてとふる飼を
さし出して学を飼ふよりく時きんこするふふる竜乃
ふふ火ふりしてる故数きて力故出くるるるるるし
学ふの時りとんて花の時ふりとふひく餅を啄むひ白
絵とふるの肉ふくのりて陽まのめるふ花ふおのつふ時
ふるふしくかくのふふ新をんふて餅
飼を来ることれを狩ル飼ふふして立る飼ふの一仏
こ芋白ふふ実の白ふ狩ふ帰飼ふふてとまふ学ふ
学ふふ時ふを附ふれふふ

篠ふく樹を柿乃夢さひし　野水

炎京季ふふりふふて芋白の学を伏ふふんてふふを
附ふり熟柿の白狐ふふ柿の夢ふくふふくこ
味しさふる色し

三線ふふん不破を幕　人　重五

立ふふ篠ふく樹くの芋ふふふ不破の学をおふふひ
学ふふんし不破の関ふふふふ新伏ふれふ琴ふ
もふふんを花ふふふを伏の物好しふ伏ふこ味をんとおう
ふく伏りふり

立すふふ炎流て寄ふる碁を忘乃　芭蕉

芋ふ芋白の三味線伏ふ人ふふふふふふし
ふふふんふふふふふ人こ伏ふれふふふ白のふふふ破

乃至不可説之味線うりてあるく狂言美陽のあ
ぶをうりて拾ひ出す傷をさがす又ひろうてあるく
銭にて日暮を作る所不可説の人とはうらうれしく
とうとい仏と尊ぶもあるべしと思ひ卒の仏像
あるうるあるうるあるあるの不破乃関の不動てあるとを
待ちもいくばくしてこの味せんぶんあるの拾ひ
いろうるしをあるの白のうんぬ出しとうとうあるの白性うるあん所
うるの仏作るに仏作て手拍の仏作るくきやうてうるに仏答うり
らくうん出しとうとうんうるおうるうれ

森さまのくのさてを　七十　杜國

ぶい碁をうるとうとうより老人と仏作り白をいに森さまのく
ふむりをうくに仏作るもひとうるうるき時に年庭

も性うるくしよりうるものうるひるうるとを拾ひ七十とうるう
うるん拾の一字を働きあり古分分年ひるに止るぬるのを年
ものうるくうるいくく老ひるうるる　亦酒債尋常往處
有人生七十古來稀

奉加帳序堂て金うるうるひ　重五

苔白拾ひ七十といるうるうる慚愧をせるうるひるうるひ
うるて序堂の事かを仏作るうるて序堂の再興拾ひるうるき老
ものの系ものくと金銀を拾ひて仏さいするをうるん
つけて我ハ七十ひるうるひるうるひるいまと後生のう
拾をもひるうるんるうるひる堂金の建立作るうるも一陵乃
供ひるれもうるを時　放蕩とあるくるひるもひるう
るるくるて後生世ときけい立をるひ仏作るれるもるす

やうもてのほかの業平の多き孫よゆゑ乃ちかの世の
人にきのふかの思ひさりなるこゝろ舊門の風雅の孫の
たゝなるうちにこれを考へ人を諷誦して仏の座をもとゝ
しめ仏をたのしこゝろ深ふ和歌の道を歌きこ
きの孫なるつきこゝろ九の珠数をもて手ふとこゝに後の世
乃ち法すれば文言ふやゆるとんなく孫の座をもとゝ
言ひなる人をこゝろ一言に後世ふ人をこゝろ風雅ふ
こゝ信こゝろ学ふくきこ拝風雅こゝろふ心を学迹をこゝ
言ひなる後の世のゝんふ風雅こゝろけるこゝ風雅こゝろ也
爺ハうり和の歌白ゝもの人ゝ九の爺の歌白を解きんこ
すゝふ心を学迹をこゝれてこゝ作こゝ白こゝを作るゝ雅

いきりへ一ほ見こゝ孫原氏こゝの俗拝もこゝ俗すゝふ仏乃
座ふこゝてこゝこゝ俗ゝふ孫ゝを歌こ業ハゝ孫ゝ孫の座をこゝ
見こゝふこゝこゝ上

元こゝの傘乃下　茅ゝこゝ　荷兮

こゝ芙白の今を宝ひこゝる人の西さふ久こゝ雨拝一京
こゝの附ゝる一　ゝこゝの人のこゝこゝ

蓮池ふ詩の子拝ふ夕まゝ孫　杜國

芙蓉白をゝこゝ夏季を附ゝる今秋の白こ
こゝに毋つゝ孫拝をすゝ　野水

こゝふ五辺ふ紙麻と附ゝる孫ゝ孫ゝ八世こゝ孫ゝ紀の白
鎖りゝる一

月ふこゝ孫ゝ座の梅の数乃赤枯ゝ　荷兮

芭蕉庵の雪の芳白をつつみふる夜をうかれたる
職人ゆゑいかつゝ芭蕉好ほうもつ紙布をもて蓬織る
たゝもいかれたる夜を作をもの用ひて夜編を作りうん
ゝさん一ト今わりかりる人物をうつ編ト云ひ髪の
ゝくうるゆゑいかゝ
夜をかるゝ雲ゝ中兼の人物ひとせゝ数の衣
数者のゝゝうゝ中を裁ゝゝれうゝみゝゝ
かけ方数ゝ月八夜ゝのうりうて

夜をぬきわゝ臨済をまり　芭蕉

芳白を編ト云う中て兼の人物をひとせゝ数の衣
うれてゝうゝ老女を併うゝ老女ゝられゝゝ恋ゝ
帖ト作ヒ系語玉函ゝ　婆子焚庵之話則老女禅那

水帰ゝ除夜の侍を生ひたるゝ生侍の恨を拭ん
為ゝ小女をゝて侍ゝ夜茶の体をさゝゝ耶今一問曰
正當恁麼時如何侍答曰枯木倚寒巖三冬無暖氣
三世佛祖ゝ徒三十年来俗漢養ゝ侍を追拂ひ度ゝ
焚ゝうゝ老婆ゝ

秋雨のうゝ不ゝきくゝ　野水

山白除海を行ゝうゝ移機をゝて恨をの附ゝうて
一休禅師の今ニ閑の夜ゝ雪のゝきけいせ花生
乃父ゝ夜ゝ花是則ゝ色ゝ禅ゝ夜ゝ水ゝを
きくゝうゝ耶恨ゝ所性ゝ禅語曰大海降看霜乎答曰
空蟬ノ声ヲ聞ニ乎ト者ハ即刹那生滅ニテ生而即滅ニ滅而即
生　ゝ生滅ニ無始無終性ゝ

生死示くのごとし悟を敬性の示をや附こんを

蕎の実つゝ毎雪下ちんもちり　重五

芭白の影さんとうをとうち被て蕎の実つゝ二白一三ヶ

て影のうる容を附うり無つゝ芭白手ホ茶ホうゝ

叶ん二白一三ヶ

枝より硯をひゝき山うけ下　芭蕉

蕎の実落のゝ示蕎の実の雪落ると二白一三ヶ附ゝ

三ヶ白の場を定ゝり白ゝ樹下石上を梅として山川の

美ゝ示ヨ杉ゝ三ヶ九のゝ人を附ゝ　ヶ山うけ示寂寥として

示影を楽ゝ桃硯を取ゝ蕎の実つゝ示雪下を

やらけつゝん

ひゝうい無侍の肩う内侍う　社國

芭白山ヶ毛ヨ硯をひゝく体に移して旅人ヶ乱ゝ設う硯

をひゝくと云詞ヨ少ほひ呂乃旅人ゝ呂ゝ乱ゝまを多

枕或ゝ俗形称ゝ称ゝ例のヨ服一弦ヨ乱ゝ

乱ゝさんゝ然ゝ毛人ゝ乱ゝ示内意

上蕎の旅ゝんゝ乱ゝ風俗のゝ乱ゝ肩う内侍を

狩ゝ乱ゝ乱ヨ十ゝ乱ゝ口ゝ示咲千ゝ乱ゝ

三りの花野影乱ゝ乱ゝ乱ゝ　重五

芭白肩う内侍ゝ乱ゝ乱ゝの安官並居ゝ体ゝ乱ゝ乱ゝ林示

意の影合を乱ゝ示ゝ肩ゝ　紀事曰禁裏清涼殿南階

前有鬪雞其雞諸家中雲客被出之仙納弥市頭

此事決勝負

ちゝゝうみいとなむ越の猪飼刈　荷兮

[illegible]の物を貢する体を附し[illegible]の
物語刈[illegible]貢[illegible]載[illegible]乃熟語[illegible]
云ふ[illegible]代の[illegible]を附[illegible]白
髮の老[illegible]も悦ひ[illegible]貢を[illegible]民
[illegible]悟[illegible]代[illegible]

冬の日註解坤

浪花　黄華庵升六著

越後國三島郡日山七田市印

あ[illegible]陸津[illegible]火燒家[illegible]
[illegible]

岩[illegible]のをのつ[illegible]　重五

万葉集二雄陸人芦火燒家者酢四鍬方已我妻[illegible]常
弥記　人麿　此[illegible]を詞書として岩[illegible]に対して白
芦火[illegible]家[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
めやいまゝにねとゝ[illegible]て作者[illegible]れ白法と 古今集三夏の
歌乃やうに行わ[illegible]梅の[illegible]
[illegible]
やはらかいと不申[illegible]
[illegible]
解不[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一首の美不[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

題向をめぐらしてしゐ出ぬ讀書の指子おとを
しるされ

蒙蘇馬骨の霜ふ咲くころ　杜國

此翁ことしに手書をこゝろみ玉ぬこ初んの作りを
きふ所なくして先初乃五文字ふ花筏と夏季のもの
を性りすくして丈夫の作り出て白を過てる骨乃
霜と曲翁をこゝろ実ふ百白の中ふ玉こゝも
平白ふいやこゝろへられ弟三の位ふ偽りさうふ
るて叔る骨の霜と作りこゝ此白の手書こさきき
こに筏のこゝしられふ名こゝの濤く翁木悉く
皆枯こゝふは骨を殺しこゝろをこる骨の霜とりこゝ
をきこゝ殺りこゝしるのすきまこゝられふ咲こゝろと

をこゝろをこる手書をふ師ふくき幻術ふくこゝを文
字翁の弟三とりふこ　第三文字翁のこゝ化つふ所ふ殺
殺字翁の弟三こゝこ字を偽校こゝられこゝこゝを偽
こゝふ山さこゝ此ふる杜翁のこゝられ五字一名の初を坐ふ
居れい留ふこと偽ふるこゝこゝやまを二字五字こゝん
偽ふるこゝこゝも字翁の弟三をこる程乃手書ふ二字五
字の此ふる杜ふこゝ字翁こゝふ八こゝふて行の手柄ふくきや
皆是殺り初ふこゝて已ふ働ふ所もあくこゝられ蕉門こゝい
丈式のこゝふこゝの数ふもふこゝ咲五こゝ作をこゝ翁
こゝをこゝて字翁の手書こゝもふくきこ蟬もこゝ空こゝ如
哉ふ此弟三をきこゝしすこゝすれい翁白ふこゝ故を

詩經七月在野八月在宇九月在戸十月入我壮下美

きりに成て蟋蟀も時ふまと定るとなへい初秋の気色
ふるうるしなを悼とする叶い隠障の次よりて次第も
に少し新きのゆへ才三位と平白ふまうんきを所
をしに叶味いをしるしぬくとを定るふるて後の気を
すくるとて サ五ケ條曰才三の変りは文字の定るるは
一句の字数句のやうるれるとしたのとるるぬふるて次乃
句へ乃たくきるとし叶理ををる叶くよの字てのるも理
きとをるくしたるとも叶句い才三のやうくと百句の中よ
ても撰出る程ふ才三乃格ををるとれいやるる定るる
留まるくし 才三い平句とい初りて曲節のうちいれ
ふても一作るるい平句の差るるし曲節なるゆへて
後の定るる叶い亦句と才三の差るるし故ふ手ふ差よ定

るるるる所作

寂しさを田ふのうくるくる黒きし 宗因
主を山の杉も切て雪原し 仙順
叶ひ其芋植さるる社咲ふるめ 芭蕉

ゆるの才三句ふ平句ふ平句ふ少るるる平句少るるる平句ふ才三とかくの
るくる作る叶い才三とふるの論るし主る作い公義る骨
の雪し咲ふるし一曲るるるふ性よ才三の位位るる
平句ふい雪ふるふへきとるるし主るくきるる 作主
続廣の性さ主るるさの座するるの場ふして格ひとふ
ふ花と白ゆゆ色ゆゆとふふる骨の雪と雪ふるるて格続
を女乃浦ゆ色の才一ふし主るるるふ公義と
作をるるふきるふよ為ふ彼肉心如板又の座るるもの

実結りて結ぶのうつりもこれ実に功者の仕業
なるべし

踏入るあとの月うすかるべし　野水

芝垣をうつりて出る月の光　芭蕉

ちりこそこそに芋白る景の哀れと云ふまし
ともなひなせて踏入るとは作りなん函に林和靖の俤
をほのめかせるなるべし

風吹ば秋乃月瓶子酒たる夜日　芭蕉

白のこれに踏入るとは作るなるべし
を云ふ寂寞なる容を附ける為なるべし
に酒をきとは作りなん月とはいふ秋乃月と附ける日並
のりかしてさく縁とはなるべしいふ

と丁字に出るし結る白きこれ風流しなるべし
秋のいとありなるに瓶子酒たるべくなるべし
なるべし月なるべし京に人の袖い習されども踏のなるべし
百姿の老翁ともなるべしとは人きる作者乃手
柄なるべし

萩殘る芝なる市に振まる風　羽笠

芝白酒なるべしとなるべし多のなるべ
好なる紙型乃中に延殘て世なるべしなるべ
故なる拂をなる世合なるべし作りてなるべしなるべ
賣なるべし附なる萩殘に萩の花芝なる市に振なるべ
京町に鬻なるべしなる萩八出乃を持なんなる為なるべ

て季の行くものを傷く季の物つきなる初めて
しておりしうれ去るも当季より来る白も来る越而
より来るも行く一悦ふ云うし猿蓑集に白ふこの
美しうしうねの月を八越而より来るる白より同集に
書天ふ方の身の新おかけ出る当季より来るる白
当季より来る白い一白より文まをもちて風情を記
を徒ふして尺処をし風情ハ白より振りを附るハ
白ふ振りを附るハ去来抄に物ふて小粽中さ降ト
ふ白を省去ふて小粽を降ト直されより見白より
振りを附るも凡物い文まのものとをいいひも味ふし
論語　子曰言以達志文以達言不言誰知其志言斯
無文遠不行矣さ仏文まをさてい見まお耳ふ物ふまる

ものも

賀茂川や胡麻千代祭り徽を　荷兮

芋白茎を市ふ振て粥屑ふ祭りをくしとて附
ふ白茎ハ祭りを市ふ振て粥屑ふ祭りをくしとて附
の市ふ祭ふしくおしたものを捜し出して胡麻
千代ふ祭ふトしふ俗ふ祭ふ迎ト作り
ふふて壹ふくさまふ祭ふ　此祭い上加茂の川
上ふ移前の祠ふり此神の好ふ物ふて生ふ物ふ
ふ胡麻を植ふふ一本も植ふるふふ故ふ此祭
を胡麻千代祭ふいひふ又ふ世の社ふもふふ
七夕樓ふ出ふ

いたくらの賀耳ふり物ふ　重五

此附会おもしろし。祭の翌の事りとしては例の千服一後
ゆて来りしうしたるゆゑ来くき絮の事ゆゑこの好しく
附ることこと古の祭まくるて来るに絮或い嫁を分の
一門我もくしうしひ来りて張りきゆ家家乃絮ハ行
ゆくゆ来ぬてて絮ゆるりきとさるゆてゆ伝の張い
しはひくさまれさまたて姑のかつひさもたるを
しうしひやうも出くいか茂川の財うるくし

ゆふて布搗ゆゆ野水

ゆゆ絮ゆるりきくゆゆ乃ゆ附出してゆりと
りよゆふようけくいくくとりゆわうれてくゆるる
をしゆゆ古の焼の情ゆ執るるていひ弟ゆ絮と
ゆゆのくゆしてるつくまるゆ月を打うゆ

て人ゆ見ゆ古ゆてこう九居るその姫のゆよゆるゆを布搗く
こうゆゆ訊りくさゆ女ゆゆ者くき伝く出くるうり
ゆゆひゆゆゆゆ附くくん訊りれてりゆくきと笑りれて
と作りるくて文まゆるくし

うゆいたくたくを越る三平　杜國

笑りれくくこうゆ乃女くくひゆゆ白くこハおのれり
ゆくくと醜きゆくに神懸ひくくきくのゆゆるていくけく
卧をうゆくくゆゆうかくくと二十をも越るゆる女
いくゆりれく三平ゆ三平二満くくて乙清前のゆくくと

拾くれくくゆるくの琴の離ゆ多　羽笠

茂ゆ人情つきくれゆ乃ハ伸しゆ乃ていくくゆをおゆる
乃女の住しゆゆ池のゆくゆを道逸して琴のゆりきを

うつせみのかなしきかなしはしたなく我身のうへにかさなりてうち絶くうるくしく　万葉集
涯涘の入江巡りを暫すゝにみ藻のうへにひとりねるよ　元
暫うたたねして我身のうへをうかべる夢
火をうつす炉辺の人をあんの春　芭蕉
夏目季の附句して泥乃浮とうの孫容るくりの小家作りて
うゑ住居する翁者の住るくし火をぬる巨燵とうの字を乃
志の時ゝ来る我人せうきれいなもちさ巨燵の字を板のお
らしを清さうして眠るもやうたうくとして故人を夢
居る老の身の住しさを余情自分のうたものるくし
門内の翁の氏神　重五
此人をうんとうをゆ咎めて附くうきれい歌のもの九主の

乃九を乗り人を失ひて今の絶の己身ひとつの玄のうく
きていきうの由緒を求めて番人の門内のさわくし仕居
住と称しれぬ乃くし世の若よたもうに若白火
ゆゑ巨燵とうの身の浮ぬのをとうくし
血刀のくらた月の　時くさ　有　荷兮
命を借りて時とうの性よ若くとうに千服一殺の玄
きれども玄若人を捜して門番とうの武家をとひ者て血刀
うくたを作りうる是ゆゑ白ういの中の若くの或い
徒士の方堂の数の口論斬りて玄合手を去果してうれ
居るさ白くさ白門内とうの玄人を空めうとうくし
雲下りくし本郷の錦　七つきく　杜國
若白を武家の玄執斬りくとうにに戸附て玄れ

の中ゆかいなりさて武家屋敷の多くて土も人氣の荒きゆへ一あれに生場をなく空地なる白さに周りち柳しなる生叶ふかりなく　旁下りて五月のくらきゆへいとゆかしく

アヤメ　納豆　くくしなるくし　野水

文字釈の所ゆりて吹るこの気色こ夫を考ひ納豆と作りて秋季まい絶ゆふ待の一字よ拾なるおそろしそ

当季より来しる白なれに白ゆ振りを付る故人の白作を味ふく

花ゆ注く椿の徽とすてにる風　芭蕉

文ハ芳白の納豆くくしなる人の位を定めて付るこ椿の徽と拾よりるとなるの白りて変季にうされるこ叔は白

ゑ知らうしく解ゑ先椿の徽とるるわるこぬこ徽の字韻會曰徽支韻敗切徽也（ウルム アヲクロシ カヒ）と説文物中久雨而青黑也ゑれゆは徽い衣の徽こ敗切ゑれ衣乃ゆ

しゆ貌ゆ白くしをとくを解せんとするゆ次の白の俗ゑものいゆ款冬をのむトソゆ白ゑ四一合せて人ゑ月ゆゑよ拠するこゑゆゑ刈　五欲六塵の境をまぬゑ見ゑるものうこゆゑゆ業障の嫉ゑるくしと怪りて生者乃の塵欲を捨て生乃の塵ゆ入んとの言少やなくん　百切の変花ゑんとゑれつ人乃ゑるのこて生ゑこ椿の咎ゑて白ゑるゑれゆ苦しゑ業ゆ著して蛇とゑゑうし人もあゑゑれゆ生業注しい梅迎のゑくしゑれゆ名利のこゑゆ深こる俗彼官袴の垢をきゑこゑて椿の徽と拾ゆるゆ作ゑるゆのゑくし

或人の一説に徴を納豆のうるおしに用ひ亦蒙求に
淮南子曰墨子見練絲而泣之為其可以黄可以墨矣
豆腐をうるおすにもちゐ不用ときは絲の黄より墨に染るなり
今も豆腐桶の黴色に成るなんの垢を拭して桶の徴に
中されるべし

俗言のいまだ教ざる茶　羽笠

茶に苦白の桶徴を拭よりいまだ味ひて天九花に注
い授業侍の嫡子桶の徴を拭ると思ひを弁て茶をのん
へるべくして俗に附るものいまだ知らざるの
行ひて山吹を口の孫語ずくし　古今俳諧乃部に
山吹の茶色なるもわるやたれにたるふして
扨文を呑ムト作るべきい山吹の茶を或ど下ちるべし

或人の解に山吹をいふ茶鈔とあるべしとて茶語をなを
のたとへいふ孔子細なるべし季をとるべき学人来るべん
呑ムとふよつきて茶食数の雑ありさい去就に納をべく
とおもひ　傳て曰白の表に山吹を呑ムトいふべし山吹を
食数に行べす尤山吹の下ゆきるべの水をヤ飲とべんの
白ものべくしるべも白乃表をもて論する時ハヤるふきべ
い食数に通るべくして去りて蕉門べんの俗語をなんに
食類なる付い色非を絶をなわるべくヤたるべし　又べん
一説に律制に湯水茶の類に食数よりされいを絶るべし
とふ解も行べも律の法をもて俗語の持合を探もいく
べるべんをたるべく律儀に湯水の類食数べるべしとい
俗語に飲食べるべて二白べるべ去べ九に踏べるべを絶を

陸一くゝやたゝん今予の解のごとくゝゝ山吹の実を
呑とゝふ白とゝるべし一説の飲食の数をされいを義あ
へゝゝ呂人のごとく仕べし

白燕湯ゝ水ゝ羽ゝ之佐ゝ　荷弓

白燕の数を呑とゝゝ五辺を併せゝゝ桜白燕
のゝ芸白ゝいゝ成ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ知
ゝゝ今武ゝ解ゝ予ゝ笑ゝのゝゝゝ埃嚢抄曰求法高
僧傳云鷲峯山ニ春半黄花ヲ開ク艸アリ大サ手ノ指詩
有其子同ク黄也曰春女花山吹ニ相當ル歟ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ芸白の俗歟を呑ゝゝゝ一白ゝさ安伝ゝゝ
九俗の体ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ求法高僧傳ゝゝゝ就ゝ峯山
の山吹ゝゝゝゝゝゝゝ天國の体をゝゝゝゝゝゝゝ由孫

をゝゝゝ燕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宣方かゝくとして下ふ弱常のたゝくさゝのをもてたおり
くゝをゝのもらゝぬ叙を唐よ作るゝる例のものゝ好とゝゝくゝ

八十年をこゝ門人る章ゝ毎ゝもて　野水

叶白先八十年を三つゝ人ゝトリ人ゝ二百四十年ふゝるゝを二百ゝ十
才寿ゝ毎ゝたゝるゝくゝ人ゝ孟ゝ子ゝくゝ解ゝゝてさるゝくゝるかゝ
ゝゝふ説ゝの説區ゝあり一説ふ曰上ゝの八字執筆の誤りゝ八の
字を除くゝゝ九ゝ十年を三つゝ人るふゝゝて三十の男ゝゝふ解を
ゝ九ゝも冬のゝ九大ゝ九ゝ九ゝ翁の校合のゝゝ九ゝいゝよゝせゝお遠
のたゝくゝゝや八の一字を除くゝゝゝゝ孫ゝるゝる解ゝたゝくゝ
亦一説曰ゝゝゝゝゝ者ゝ孟ゝの人をゝふゝるゝふゝて八十年い祈ゝ人る
ゝゝゝ八十年葦　八十年垣　八十氏の数ゝとゝて人九の字を引
ゝゝふの八十氏門ゝ細代木ゝいゝゝふ月のゝゝくゝゝゝすも

ゝゝゝ八十八ゝゝ教の年ゝ八十年をゝつゝるゝわゝゝふ只者舜
の人ゝとゝのゝゝゝくゝゝとゝふ一説ゝゝ亦一説曰八十年をゝつゝ
ゝ七十三の男ゝゝゝゝ七十をゝゝゝゝ七十一ふゝゝ九ゝ八十のゝゝふ
一つゝゝゝゝ七十三ゝゝゝ九ゝ八十の数のゝゝゝ三年ゝゝゝゝ
年ゝ八十年　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ八十年をゝつゝ
おゝゝゝゝの好ふ作りゝゝゝゝのくゝゝゝゝの見解ゝゝゝゝ
ゝゝゝの三説ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三の説ふ為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ半妃ゝゝゝ九西施ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

毋も持うとなれば生命孫の系を孫又は目出たく少
おかしく叙の定るなり しい生活ひなやうんとなるく
定をうるさは附るるものなるく 叙のの 秦穆公以象
牙為之敬王以玳瑁為之始皇金銀作鳳頭以玳瑁為脚號
曰鳳叙

おうるちなる七夕の作 杜國

定ゆ芳白の八十まを三つ五つとなるを二百四十才の寿として扱ふを
凡人ゆるるなるなるし 仙人ともなるべきなるなるを附る表の四
白目ゆ彩なる言ト林和靖の伝も芳ゆ出るれを和ゆ出芳の
言のを捜して扱ふ天人なるくしなんくし七夕乃書を仲人する
と秋季を附る寓言伝の白なるくしなるの附るしゆ生
伝の風調なるんし亦の一説ゆ芳白の寿をくし生活のもと

あるくし寿なるいまを書定めもなるうしを七夕の伝仲人して書を
迎へるるともなるり附る解始の説のなくなるゆ定なるし後の説
を用る附ゆ定なるくし南説ゆ伝ゆもなれるさるを取くし
西南ゆ桂のなる根乃つなるゆ少なる 羽笠

芳白ゆ七夕と秋の出るるゆ桂の定として月をなるを西
南ゆつ月ゆトハ七日の月なるゆ出るるくし七日の月ゆ亥の八刻
西南ゆなるも

菜乃寿なるくしト木うつ寿 芭蕉

なるゆ今秋の附る菜油薫高トテ菜の油となるゆなる 陳藏
器曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云蘭澤 色ゆ義袴
のなるも白ゆゆ秋の表乃生なるなるゆ表をなるん
市人の油ゆ定なるさ伝ゆして桂乃花のつなるむとなるゆトホうる

言ト指ヲさして付るちゝんを

綾乃糸より賢なる女子くゝ風　重五

白い菜の油ゝゝに女の言あれいあるくし支を賢るト

作ゝるゝ菜乃香のゝうゝちゝん　秋風辞ニ蘭有秀兮菊

有芳懷佳人兮不能忘矣かゝ風ふをもゝ合て賢女ゝは

付るべし　付ゝと白い菜の油を絞る家に用ゆゝちゝんを

作ゝる其糸より賢なる女ありゝして家業乃計乃

約瓶ふ栗をかゝふのゝく花　荷兮

立ふい家の用を付ゝゝ栗はふへき桶さくゝて約瓶ふ

作ゝゝん前白の賢女ゝ手業ゝくし

立ゝり花ゝ接ようゝ風正月ゝ　杜國

白めゝゝしきものを結ん出して付ゝゝ釜を桶ふて法ふ

へきを約瓶ふ作ゝふトゝ家物の孫ゝしちゝゝ正月ゝ

ゝさゝのをゝ生ゝゝゝくゝゝふ飾ゝるものに行ゝゝゝあゝくき

に接子ト作ゝゝる者ゝゝゝゝし白の姿を女の業ゝとゝんゝ行

接ゝい子ゝゝ言孫ふして疱瘡ゝ麻疹のゝゝちゝふ正月を

仕立ゝゝて祝ふゝゝゝ時ゝゝゝ正月乃ゝゝゝゝゝゝゝ部

鄙ゝふゝゝゝゝゝ　芋ゝゝ七月盆ゝ祝膳をゝて豆腐して

手をゝゝ方ゝに夜路を除くゝ迎正月のゝゝしゝゝ行ゝゝ

ゝゝ

法ゝゝみ手向ゝる矢菜ゝ言　野水

立ふゝゝゝ正月い新鄙ゝもあゝるゝ行ゝゝふのゝ

多くい田舎ゝゝ九ゝゝゝゝゝゝ正月祝乃行ゝべきふをさしゝ

矢菜の宮ト八付ゝゝん矢菜の実眞のゝゝゝふゝ行ゝゝ

一ツ物ヲモ洋ヲ生ヲ忘ヲ考ヲ行ノ亦一説
包ミ手向ケトリの解ケ行ク伝名ヲ書ケ行ク
此解杜撰ト数多向ケトハ疫病祓の除厄のため正月を仕
直して祝ふ為の神をすゝ足事乳神樂やのり
を云ふなり

寅のり年且を鏡治乃急記　芭蕉

此附故翁の書ヲ知ルベシ試ニ仕解を出ハ古の鏡治
台命を蒙リ名ケる叙を手へ〳〵ゝ名ケる叙を起ス
ヨ私のちゝ及ハされハ勇者の名ケる叙治て拭
て名叙成就を祈ルゝ附ゝんを宮の一字ハ叙起ス
器さふなり

雲かうたゝきき南京乃北　羽笠

此句ハ源治ヲ吳の干将を呼ひ出て南京の地ニ附
たゝんを南京ハ吳地ヲ指ス云ハ吳ハ楚
楚威王の地ハ王氣ケる地ヲ掘て金を埋て以て是を鎮ス
ルゆへ故を金陵と号キ今の南京ハ刘ゆへ成
ゝ一白乃文字ヲ書て作乳ケる也
秦始皇以金陵有都邑之氣改曰秣陵矣

いうさゝて誰ともしらぬ人の像　荷兮

ゝ云ハ南京ゝ中を指て附ケ中都ハ仏法興隆の
地ハて昔ゝ仏閣あまさ行ハ也故翁も
秦乃多ハ大ハ仏ハ建都ハ中さ行ケ是を
ゝて是を云ふハさる旧都ケ行ケるも京ケまさあ
ゝて多ハ詩ハ人乃係の恒ゆ過て行ケ

ちるくいとさハ瑠璃玉垣乃類と

泥てこそのきよらなれ芹の根　重五

はけ付たる白の像を古護る座主のたるくしちるくしを人を

陪君子ふりして後宋の義叔うてくさちるくんと愛蓮説を叙

向くくくく

はちをひくるゝ僅ゝ十歩

つゝみよりて月とゝ落すしられる　杜國

はなゝゆゝしくふるに定めるさの影うゝ見ひよりて笠ゝい芳
書ふちゝ行り例やいちるけのん安さよきしの笠ひとゝふ越人
うゝ日よ故翁笠を加くゝ別傳と歌を設けるゝて影系
愛白の光りをこゝけうしゝれい前云い大切のこのしん
行りくきるゝふゝて白こゝい僅ゝ十歩の名もしくゝくゝん
ゝい忽月れゝるゝ有為世ゝ万ゝくゝ世ゝ
歌ゝしゝる大ふ歳行り

水ふゝ月のいゝ行ゝ　重五

庭のあいちゝ乾ゝぬふ夕ゝの光ゝけきゝく出る月うゝ

ゝるゝくゝゝ化のいまゝ乾ゝぬゝの水のゝくゝちゝくゝと
月乾のゝつゝこゝを移書ふ比喩して本白の餘ゝをく
けゝる移ゝ移書トハゝ芭蕉ゝ特ゝの名ゝ但藥經曰是身無常念
念不住猶如電光矣ゝゝを底ゝ少ゝ修ゝ作ゝるゝ不留
刹那生滅ゝ化ゝ僅一歩のゝちゝも生ゝ死行況十歩の間と
や詩ゝ芭蕉水を踏ゝて

歯ふの影ふを初秋人乃矣ふ負て　野水

夜ふ季ゝゝゝゝ月ゝ三ゝ詩格ゝ物の場ゝれゝ大ゝ変化
ゝゝて芭蕉ゝ歌ゝの下をさゝゝて敬ゝて物ゝ人ゝ作ゝる
ゝ傷ゝゝ時物人ゝ水ゝゝ移書ふ四一ゝる時歳暁
ゝゝゝ扱白ゝゝ市人の初商を祝ゝゝゝて猟ふの初物
をゝゝふゝて歯ふの影を胡蝶ふゝゝけひゝゝ世の門出

を祝ふの為窓を画くうめ

小の門を押明乃　昔　芭蕉

芳白歯朱の手ふをかちうちかけ　桜ひ飾るとるかり眼を

つけ〜門所よ初春の貢と附うり例さん猿赤の奏とこ〜

のさ〜めよ花紫ろうり林示ろ〜貢を寄ることく先初春

乃はるの祝貢〜ちるこ年中行司家舎　初春の千

代の例の出演ふ弱る猿赤も我君のこと　小の門よ小を

格陰ふ〜て卑殿の者乃通入すべき門ちかにちるく〜赤

小窓閉くの掃ふ〜てこ紙押明るとかり一陽来復の

こちろん

一ろ巣ろく扇子風の折うろみ　荷兮

芳白大内のさ為ちかに生こ〜ちひちるふくちこれものを附て

表の掃除こちろ〜ろ北の門ちかにみこの乃ろん鍵〜こ〜ん

こちふんを寄ひて掃除の体を附こ〜ん来のこ〜こうる家を一

白の化粧ちこ〜て扇ろて巣搦くょりおり〜ろ〜風乃

年ろ年こょ八門をひ〜く〜ろうちろく〜

茶の湯者あ〜ひ乃たん者　正平

掃除こちろ〜ろ茶ふい者所好を入出〜て茶の湯者と附

こう来の仲のあ〜こ〜こるすこれこん者のホろ〜つへきも

かこふ不浄ふ除こてこ〜ろく〜ち人の家ふ来の所に

十こ〜ふ掃て来〜我こ卯をちろうみ一枚寝ちろ

ちこ〜たけふ物ちひ姫ろ〜つきて　重五

此白い芳白の茶人儒者の姫あを誘ひて邪こを道を迷ちふ

体を附こうちこ〜けょ八こ〜ちろく〜と羅待ふもこぬと

[illegible]

原氏より[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

連て[illegible]

炒竜ふるまひける　杜國

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芝莊の場を附て莊の主人ト云ふ吹抜れる中すぢ
の所に月入もるゝ秋風烈しく吹荒て
落葉の所々に舞ひ乱れを形落葉形ト云ふ作り
方いと面白く

新月花双六の歌二味 杜國

落白玉ゝ〻ゝて茶の風流なるを双六ゝ〻
附て白玉ゝ〻ゝきの場ふ作りて伝来の二字を
双六の花ひを白りせるく

新花買ふて酒まきく 荷兮

新月花ゝ云ふ題を附て季をゝ〻
花い本草綱目ニ所種ル二月至五月ニ開花ヲ晨乗露ニ采ル花ヲ
ゝ白の双六ふ新原ふ宿をゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

ふ作ゝ〻ゝ新月花ゝ〻ふを買ふ作ゝ〻ゝ〻
合をゝ〻ゝ〻

ものふゝ〻ゝ わゝ〻ゝて離を作り居る 野水

紅花買ふゝ〻ゝ〻ゝ用をゝて離の衣裳をあゝ〻ゝ
云をゝ〻ゝ南人称ゝ附ゝ〻ゝ手服一伝の場ふて風情ふ離作
ゝ〻ゝふ作ゝ〻の傷ゝ附ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
浪人の住居ゝ附ゝ〻ゝ職人の仲ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻の業を人出して紅花ふ離のゝ〻ゝ手拭あり

命野の男ゝ〻ゝ米ちんとこゝす 重五

ゝ〻の山ゝの業ふ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ附ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

附へきかるに其儀なきゆへ
の白として次を附るゝ乃扱ひ去おとゝろ〳〵蕉門八人の扱ひ中一
ゆゑたゝく季詞なりとても白を結尺寸にて季詞は鶯
なとを雜なるものゝ雜とし亦季節なく或ハ性なる季詞なりとも白
の結きをつゝく季の所作なるものゝ外にて季を尺寸〳〵
て四季を附るゝ蕉門の傷さと他門にて季詞ゆゑなくして雜と
なりたるゝ其季を附るゝ〳〵系門にもゝ其意とも
亦さゝゆゑ

陸奥さきゝく津浪の水ゆゝ荷兮

是ハ津浪て一郷一郡の茅ゝまを附ゝ茅白の米を禁玄
ゝ乃沸敷の米と扱ゝ

佛喰ふる魚ゝ　亦　芭蕉

津浪の大変ゆゑ大魚の岡ゝ
白の紙向ゝ
現ゝ亦渡州
の作仏ゝ

縣ゝ

此附ゝ
ゆゑ大魚を解ゝ
ゆゑ花の
花ゝを備て年ゝ
いて花ゝ
花ゝ
日向國ゝ
ゆゑ男子の

ゝ仏喰ふる
ゝ一
ゝ出
ゝ
ゝ
ゝ

五形菫乃畠六反　杜國

五形菫の黄をとて附る苗白の咲て月日花よ植
ひくるる弱者の老過ぎるまでもとの里人なるて
作る九浦山里一老者るれども已り栄花ふ多くの田畠を
も責たる一て今い御公反ばかりも残りたん支さ義く
て五形すこれのみとて世を風一たん

うれしく嘗ちるこ雲花ちりくし　芭蕉

五形菫の咲拔ふ形ふくの咲ちるを色を附ける

春夏の二月　野水

陸ちさこに春のりのうくくふもア午ふいるを
ちるくく眠たる

おうたるや矢刻の橋乃ちるこ　杜國

東海道宮崎の橋ふして長サ弐百八尺と
こ訳語のるのれりゆくを橋乃書きとけらふる附ける
矢作の里ふ日本武尊東征時作矢奉之ラ里ふ名ふ
咲伝ふ

庵屋の松をとりみて送りぬ　荷兮

芭蕉のヤ外ふ手ふ茅を取て立ふ下手の松ふと
ふ附ける生変化ありて白ふ花ふ
丁年賀ふ武い嫁礼松の祝ひるもりて松よ高て代の
寿ぎを祈ふて送ふ

拾ふ子を宗荊ふけふのひろん　野水

うれ起情の附く他のふ花ふ送ふる松乃祝ふよ
ひふ花ふるのるを花ふ白ふいおの松ふ

[illegible]

[illegible]人の傍にのこりて[illegible]

[illegible]一本の松乃[illegible]

今は行すゑいくさりつゝ[illegible]

けゝ類りよわりよのもりの[illegible]成人[illegible]

[illegible]年も延つゝんとす[illegible]に花のこゝ

しゝ年も十三才[illegible]をかけ白作玄文[illegible]白いもう

[illegible]

小所物[illegible]

[illegible]

一字は解小仮[illegible]

三十りをさんたむ〳〵乃　賣年　重五

は白い人の[illegible]

凡十三年も[illegible]今は生るの我手ふりてあ[illegible]

しく育てさんは[illegible]乃を[illegible]

[illegible]

乃乃さん賣拂[illegible]命を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪乃荘吳の國[illegible]　荷今

[illegible]東坡拓の併[illegible]

て雪のひとしの宵寒と侍る呉国乃詩和人雪の真ホ茶
して詩に来まちちん多くしきい風人の学ホ毛ちこい秘
蔵の刀を価ホ代て笠庭を住友の交り遠近の伝玉面ホ
一詩よ黄金不多交不深ともいれい玉ホ用友ホ信
ちさ人間の義侍をも誠めるるし

襟てう雅う片袖をとゝ　芭蕉

云い方ホ雪と粧人ホ近安の財と振付い方旅の加ゝ袖をゝく
人も同一雪ん乃風狂人と侍て白ゝ云いたりふ水て近安乃片袖
を襟却ようち袖さつ（おり）ちゝ（ちゝ）ちゝ（ちゝ）ちゝ（ちゝ

三り月の赤い時く籟乃琴　芭蕉

芭伸しの白ゆて苔子のたくとそうの八れ乃ゑと付て渚
行を学ひ行ろうちんけ白すうくうて風情ちの
はもうれさかうふの白い却く作ろとのちん赤を
時くの調力乃り

秋波うしくうて琴うくちるの　野水

苔白の錆を三井寺と中ちうて五琵湖を付ろう却秋波水く
印ろて鈴ふ脆琴すれい清風除来水波不真飄ミ乎如遺
世と逸ろよ赤壁の抜ひをもろひ歩れて彼ふ客ふ洞蕭
を吹うの乃り抜真ろよ赤ふして乃ろれちろひの抜ひふ五琴や
ちくんけ乃くちれ一と頼りふとて忽僕をして生五を
かくちうまを強くとすくきふろれも彼ふ閉子眠一統の場

をうちちろ作く一諧い真ふ乗して偽ろ作ちも偽ちく寿る
吟少ちや真ちく作い強ろで生ちくくさちうふ例のちの分
きこちちて向ちの子眠ふして弱当の人乃ろひうくさる赤
ちくんう

意ろれるゆうして生を放ちる　杜國

ち い眠ちの乃ろふ翁を垂て日ちくく楽しむ人の作ろう
ちくふ氏白のこ味とうふ苔白ち琴ちして偽ろ作ち
強ちうれと言を性ふ併て生沙魚も弱ふい釣ち作ちも釣乃
て乃作ちれ吟ふんいろくてうう釜くちけ乃ちすくと
放生の白ふ作て左んふ濃ちの人濃をんきるちくく

ちろうち乃会仏叢を乃ちつる　荷兮

苔白沙夏を放つと言ろう義んの容をんちう白ちい叢を

陽つるとられいとろも嵯峨ちりの雫落る地ゆ庵をト
てろ落りて行ひすやすやして居る体をおよりやするさまと
声ちさトハちるうちゆ第たりをのちるゆてもちくとちれくと喝
へ居る後世者のさかいと殊勝と

うけうすきりの蜘けゆ起住く　野水

玄ゆれ苔白の念仏をやする人を付う義を陽るとつうう田家
乃住位をおりゆ苔やてちろ細きさかうくひいちをう鈴
すさとちゆて板もいく文ちうて行蜘の火のちろくとちるゆ
アちゆ念仏の声の面うにやるちの淋しさはもちりれ千起住
ちる寒アんるうて

ちひうよりも花の芽川　重五

玄ゆれ蜘蛛ゆ火ちうゆを咎めて玄を附出うう人花

きゆ玄ゆ初ゆ玄の乃ちて乃ちひ密ちゆ玄ひりやちんとちりゆを
ちちゆ玄ひいとおりゆ行蜘ゆ起ちひるちとちに苔ひ
くゆ文作りさんおちひうるつるちゆ乃ちれと

去うれ飛たゆ花のうを芽ゆ入　荷兮

玄ゆ玄の詞をとて苔白をたりらやくんを持りる附と白玄ゆ
苔ひくくとよゆ玄ひうゆつる玄の切るうゆ玉も消くてんと玄像
ちちるうくゆ伊勢物ちうよゆ玄ひ乃ちう出ゆりゆ玉のちるる
らん花ゆりくんくゆ玉乃ひちよ一白を除く苔白へちてんを苔の
蔭玉入と附りちる功者の業ちりんう

ちの年の月をゆれもおうりく　芭蕉

ゆ白ゆ西上人の辞世をりて二百一年ゆ付くれう西りのちゆ
称りくと花のちちゆて玄死んちのきちれ乃ゆ月の乃

白さいきりてこうばしく菊の露すゝいつるれば流を所もち
ゝるを〳〵ゝゝゝ

あらはれたり

擬梅山水の体を求む所陳　重五

白い起承の二句は場のそなはれる事を述べ
のたりなくそなへり本来敬礼して学ぶ事を切に
望まれまさしくそなはりたる山水の体と為りそ
なへて第三の位なく侍りて平句の白い雲の
の遠きをそなへるものをえらべし　此
句は明らかに白こい古文曰後赤壁賦霜露既降テ木葉盡脱テ
人影在地仰テ見明月ヲ若本敬者して月を陳べきものなれば
人影鮮なる地平なるを求めるべし仰げば月明らかなる
とて此句の形容を翻ぜて冬の夜の月のなりなれば
なりなれとなりなれば山水の体を求めるべしとひらめるべ
かし

ひさかたの牛の捨こそ侍りて　杜國

此句は山水の体と云より捨を運ぶ牛と云ふ事を引する
ものなれば山中の喚しきを明らかに
ふんせりなりしかしなれども手に系牧なりしこと
ものなれば
まことに系牧なりしこと

雲こそ系牧なれ月のうすと　羽笠

云い一体して表のものなれば篭堪と侍りなれば
雲はやはりまるもなれば
くらなるなれば篭堪の望固なる家をえらべて月のうす
くなる体をえらべし侍りなれば
捨麦ふしなる侍りなれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芳白ハ雨後の体をもめでたしと云ハ松ハの立のうるハ雲
天のさゝなを附くるにこゝに新茶の白ひを持てうゑし

雑遊ハ烏帽子の女　五三十　野水

夜と三三白やう白のつきさゝれ芳白の陰る風の寒とうかゝり
附を起して夜の白をゝひ寒ゝう丈もるゝ行しの女五三十ト花
やうに作りてあるこの宮女を遊ひの遊無とゝゝるといと
うゝひくゝう

夜ゝ一本ゝ作ふこひの落衣　羽笠

夜ハ雑遊ト云芳白の寒さハ妻の形よりきゝれの書ゝひ
ゝちのゝうゝ作ゝ衣を人ハきゝ作つとゝふゝうゝ見ひゝうて大
名衣或ハ書者の別業と附ゝうゝの夜のゝの好ハきゝ作ハ
院の芳ゝをもうゝしてゝゝゝ本ゝる山の風景を遊ゝせ

ゝう花ゝの宮の寒ゝうゝ一夜の落衣ハかゝ書の粧ひ
ゝるゝん附ゝゝハ芳白の女五三十八ゝるゝの侍女ゝりゝゝ
の遊無ゝ花者の書過ゝるゝきも

ゝるゝ山桜ハさゝう月ゝん　荷兮

蕉の落ゝ花ゝうゝを少咎ゝて夏垂を附ゝう本ゝ作ゝトハ
ゝ本下園を白ゝて夏ハさゝと作ゝるゝ一山桜ハゝん
ト八山中の新ハしてゝるひ書のゝうゝん

麻ゝうゝうゝハ乃集ゝよゝむ　芭蕉

山附芳白をゝく人出一ゝうゝうゝ先夏ハさゝハ桜人
むトハ原山幽谷の体と詠を山林ハ原して幽居を楽むゝゝれ
風雅を遊ゝる原者ゝうゝん原山桜ゝゝる詞の白ひよ故人故
蕉ハんの句の人ハ作ゝ花ゝ寒ゝに京の集論むトハ作ゝ花ゝ年

さてさうつ花穂の雪をうけ給はるの人の袖の香をうつす梅の
下の松ゝの葉ゝ書銘をれとんす云々　山家集
峯白集の歌仙の作りかたの書名を出してたゝ
に私ふ名をとゝきんすい庸凡の人乃及さうふゝ麻乃の
名実よぬこさも芳白ふりうて主傷ふくうに名よ故家乃
ゝまゝ云ゝさるをもさるべきこ

江ををく独楽巷と世を捨て　重五

芦ゝ集徧ゝゝう遠くゝを西上人近ゝも嘗ゝ抑の伴ゝゝて
人の哭を伴ゝう志ゝ仏ゝ立ゝ花ゝ立の白ゝ人ゝ　独楽庵ゝ
いゝてゝさる風人をゝゝゝ花ゝ麻刈ゝゝふ書名のゝく
独楽庵ゝふも作者の抑好ふてゝふまゝる寓言ゝゝ人の
集編ゝ人の世ゝゝん砂ゝて安く生涯をゝゝゝさゝをかゝう

抑楽庵と名乎千る伴し俗言ふ哭多ゝ抑ゝふゝゝ市山
崎宗鑑法印後州京庸方略後のゝゝふ伴て大徳波の
編集ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ
後ゝの者ゝゝ

五月出よ月かゝゝゝる　杜國

芦ゝ月出て芳白ふて芳白の作者ゝ風流の抑楽庵と伴ゝ仏ゝ
ゝふ又風流を伴ゝゝ変化ゝさゝ好ゝ世を捨ゝふを答ゝて
仏者ゝゝ伴ゝゝ芳月ゝ所謂ゝゝ法性の月ふて分ゝ
ゝゝゝゝ所昊の煩悩罪業の苦ゝゝ　謡曲ゝ五蘊ゝ
欲の浜風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ煩悩妄念の苦ゝ
ゝ朦朧ゝて法性乃月所孔ゝゝをゝゝ絶ゝて芳月
出ゝと新ふゝゝ　玄ゝの月ゝ法華玄義曰　清淨真如

如雲外月ノ云云眞不妄之義如不異之義也眞故二切ノ妄想
ヲ離レ不異ノ故二切ノ我他彼此之差別ナシ古ヘ小住ニ
ラヒもらしたる分のうちりしさひて残る方明月

たひ衣笛ふく音を笠ふ　羽笠

苔白分に残るとふを少咎もなくいきうの身は是うある俳
し此作者是ふ手うるとをはるしさせる公の咎めを学ぶとられ
人ふるしとふ中納言行平或ハ実方朝臣抔の俳を
ありひあて旅宿ふ俳ふんさる我笛ふ音を打拂ふ
とて旅中のうさをふ体を雲上ふ作りうると学ぶ
一白罪人の作ふきやくしく作りさるふ奥ゆしくて

簑輿ゆうた本瓜乃山おろん　野水

苔白ふしく旅俳の白ふ作ふもふのうに罪人のうふ乃作を

是ふ流ふまを押出しして併ふうさ作ふ簑輿ハ牢輿ふるふん本瓜の
山合ふ嶮岨乃容をふをうるしもうさ終ふ乃作ふ宮人ふもんをはるし死人を
輿のうに乗ひつるしもうさ終ふ乃作ふ宮人ふもんをはるし死人を
ゆうあて輿ふうあるしうるし作ふうさに簑輿ゆうたふ作ふるる
ふしさは笛ふ音を打拂ひてうるよ併ふう扨ふり他音
用ふるくし

雪ふ降ふふし坐ふ泪くうちうふる　芭蕉

泪もり俗音ふして泪くうとおうふる作もうるこふふる
苔白の簑輿を遠流の人と定めて併ふるくし景をふて泪く
ふ作ふ乃ふ左ふ迂ふふふ作ふういく囚人ふ白景ふるうて
屍を荒磯ふ晒ふ乃ふ又くのうくるんふ歩終ふさふ作ふ
是悦作ふ　史記賈誼傳漢孝文帝二年河南守呉公

治平為天下第一以為廷尉薦洛陽人賈誼帝召以為博士時年二十一歲一年中至太中大夫於是改法於天下是故絳灌東陽侯馮敬之屬乃短之曰洛陽人年少而初学專欲擅權紛乱諸事於是天子疏之故流而為長沙王之大傅也意い洛陽の賈誼文帝のもとに召されて博士となりて年二十一歳一年中に太中大夫となりて是に法を改めて天下を專に權を擅にして紛乱諸事を欲す

身を親にとゝなる小山拾ふとて手ひ拾ふて行
菩薩とゝなのりうるく行基菩薩の多よりうるくゝ
乃ちきくきけは文ちとゝなる母うとゝなる母うとゝなる
父母のちとさうゝ〳〵緋の袋

時幸小角迦毛の花　野水

泥のくの魚はるゝ一ぱいて川物の時幸と附うる
白の泥とゝなる雲典薬頭を解を時幸を時幸とゝ作る
ちるく

ちくしてる年の小角夏の花　野水

苔白水の時幸とゝなる旱魃とゝて時候を附うる珠小思
ゝ夏日長愁民とゝなる時幸とゝなるく〳〵ゝ旱換田家の辛苦を情
ゝゝ時幸とゝ附くゝん

萱屋ちくゝ小岩屋団つく　白羽笠

ゝゝ今釈の附くさけの花とゝる片例町の板とゝ
ちくゝちとゝくてゝゝの小屋小夏仕込ゝの岩屋団春と附
ちゝゝ拾ゝるもゝ紀白ちゝ九ゝ岩屋団つくゝとゝ萱屋
ちゝゝる町ちゝ紀のゝ白ちゝ拾ゝちゝ

苅り尼の小坊ちゝ　荷兮

ちゝ伸〳〵白ゝ岩屋団ちくゝちゝの小家ちゝる小を附て
小わゝゝの遊び花る体ちゝるく〳〵苅り尼小坊ゝ八十家以下の
小女を尼ちゝひ小ちゝを小俗拾ゝ関東の俗乃通詩く釈小
ちゝ

ちくゝちゝ半ちる蓮の実　芭蕉

尼小坊ゝちゝ拾ゝたゝる拾ちて附ちゝ小わゝゝ

もの手あふぎうちて弄ふさまなるべし

[illegible]川[illegible]に飯[illegible]のそく月の前　重

芋白華[illegible]寺[illegible]仏[illegible]飯[illegible]

[illegible]作[illegible]詩[illegible]深林人不知明月来相照[illegible]出[illegible]窮[illegible]の体[illegible]

[illegible]　杜國

[illegible]孤[illegible]月[illegible]の体を風[illegible]

[illegible]

詫柿[illegible]片庇　羽笠

[illegible]孤[illegible]山[illegible]の体を[illegible]詫柿[illegible]

[illegible]芋白[illegible]

[illegible]母の喪[illegible]入　野水

[illegible]起[illegible]芋白の住[illegible]喪[illegible]

喪親者居倚廬賤者居堊室　宰我問三年之喪期已久矣子曰夫君子之居喪食甘不甘聞樂不樂居所不安三年之喪天下通喪也右論語取意　山濤居母喪負土成墳手植松柏

元政の墓乃祇と殊ぬ[illegible]　芭蕉

芋白母の喪[illegible]孝[illegible]人[illegible]元政[illegible]

[illegible]元政い蹇乃母を[illegible]甲州身延山[illegible]

[illegible]孝[illegible]人[illegible]喪[illegible]居て[illegible]殿[illegible]祇

[illegible]

字を味[illegible]

伏見市情の続きを郡　荷兮

此附句は元禄の頃の俳諸の文政の枝に成て俗化せん
ことをこの花に続のあるを対句に成て二の表り
さらに曲節尽くさんとせしを去て世をうつしを附るなり

いろあるさ男猫ひとつを捨るなり　杜國

元に続句をうつしたる人相のさをとらくしてうつしたる
なり白きを小家にうつしたる伏見本情乃民居より猫を手に
入る女
京の名に化住きれるに飼猫の名アラリ所にさるを手
つからに体と性とをうつさ男猫の宋の乃も乳家に居て
出たるを捨るくさを捨るさに飼馴らせに捨るなるを
なしなるに名のさをうつしたるなり

昔のきくに十より雪をきれをうふ　重五

猫捨るものうつしたる小猫を捨する人を附うつし人の多く婦女
鄙ひこさに捨るくさをもものなるくよりはるさをうつしたる
猫の性をを喪くものに捨に寄のをとして金をの体を
一白の熱句とうつしたるなり女子の文抄をもとに合
せて人をうつさを

水干を秀白の聖わりやすし　野水

此白は冬の月一部を一生をとくに秀白の外衣を白らせたるん
さに秀白の聖をとうつるくしきるに砂といふ水干を附て
乗のたるくの初雪小おりしき秀白を拾うくしに或人の
詩に此白をうつして秀白を四一尺に拾白の二字に一白乃
うつを抄ともに竹舟を白ヲて秀白の聖をとうつるを
ものくしたて秀白の聖をとうくに拾白をうつをに

とりあつかひ侍るとかゝる

山茶花白ふかさのこゝろし　羽笠

此茶白も冬の日一枝の花白とゝのひて枝の葉の山茶花を白ハ中て葉のかゝりしとい作りゝるものゝ白ことハ雪白の雪乃脱拾ゝる葉ゝ

追加

いとゝ人ゝとつれなく牛をうめる雪　羽笠

此雪白い牛の鈍さものゝ雪の面ゝきを題句として作りゝ電者砲也中物知砲也とゝりくもちけしきの雪の本性をれいるくゝいとゝ人ゝとハ浪ゝ羽わくゝの里人等牛小字ゝ何を見ゝ牛ゝ雪ゝ牛ゝ雪ゝ

抑て責ゝる牛ゝゝゝ

解くゝ　此句は紙の移火ふるゝを庭燎或は庭火焚新
の神まつるとて神いまめの舞と作るゝ来城荷上猿楽の考
組まるゝ　さは下名不明をちやせんゝてトハ作るゝ
作るゝ　此句まゝ

梅の宮を宮すり　杜國

交は芳句の舞のうつり正古雅なる体を熟向として移るゝ
ゝるゝ作るゝ自ゝ交方の序舞ゝして供奉の
人くゝをゝも文の序宮をゝして同一出立の移るゝに
芳をゝつすゝ　例せば諸候の奏楽序例役人称乃
古雅の芳ふして同一装束ふ出立数ひ称るゝ

銀杏　蛤　月　雲　俊　芭蕉

此句は文の供序と附るゝ銀ふ拾うゝとなる此詞玉上

にして句のうゝ　諸ふ地下の詞ふなるゝ一句乃
ゝゝひるゝふ芳句のうつりをゝゝきゝ移宮ゝうつり
月は海と作るゝて芳月のなるゝて俗名の嘆
名の風糸紙毛ふつくゝ

ひるゝふ移をすゝん　岐阜山　野水

うゝ俗辺の脱出をゝて糸名をゝゝる作く表れる
芳の此名不地名故出るゝ芳句の芳なるゝ

日比谷遠く法名家社東北に加
加ゝれ家や人乃流れ一石牡丹
片口色社月よりもすぐれ香乃重
小男花の角拾ひ蘭更
うまれかやゝ小春の性変ぬ方廣
ほとゝぎす一番鶏の時雨系 紫溪
瓦全
甫尺

懶性従来水竹居

月居
定雅
紫曉
白黛
鶯太

春雨ふるとしよりの物思ひ
陰ろうくしむらうくし藤の春
池の柳うよく岩乃色う船
陳乃花ふけ遠き春き白ひ
なつかしく語る梅の笠雨

月秋や風れきを窟に行かしく　赤佛

若葉指小松川日も中過行

遠里子うるはしの小金寺　石菓

名高き児乃きくしや紫茶　立卯

秋ふかしとき申はるまつの風　嵐月

秋淋しすきやうをうつす茶　墨古

菊の花や月後乃くれ初　侯泉

うるはしなるふかまるも去るる仏の座　棋價

形れいちるの二月の梅と知るる　丸

乾しまあうし侍や梅を海　金亀

良表無自月

きくの雲唯秋乃新とかはる　文暢

すこれつまきまれ偶りは云ふ

風なるや切義の角ふかるる

古寺や庫れなるしし義の庭

うるしすや杉ふるほそき小菊原

風なるる郭ハ今もく蕎乃月

蕎麦ふるる初しる車うる

恭法ふなるもて嘉秋光るる

素吟寺慶の笑乃さあくく事

秋多共ふかもれもく宮松

風ふるる窓光明　菜山るる

小菊の硯惜ふる矣嘉

かさなるく吟色蕎ふ蝶ふ

杜人　芹水　熊三　杜栗　可董　江蓼　鈍来　車客　九渓　和交　藁子　桂郎

文ぬ毎へ一禮まくしけ書
吟すて紙の新川塔山に
中くまこそも河鹿岩吟
さと人や雪乃橋乃帰る
咲き多ま小野の雪森や立芭蕉
すこ口れ月ま巣こ鳴り身
うまそ乃中にこ春乃水
馬下つくこ引入るつの柳に
茅舎の雪我逍こ寺山路和
のこ我ふこ陸こ
年忘き乃葉乃の数ハ明ぬ
こ春や巻れ末乃春の月

城南
春坡　春花　立牛

安
戸口　八重　古塘

杜桂　平和　双南

松笆　松蒼

つこそ乃れ乃れの乃ふすこれる
こ乃こ乃の藤乃中の　秋月

左
俚衣　楓川　波声　朱駒　光暁

河乃山里ふく

俳山や海乃中の紅葉

寺田
南和　雲裡

秋乃も世乃の乃ふ走乃れ
粉こ女乃春こ乃ゆ乃る

田原
良水　毛條　亀卜

乃月れこと乃ぬ乃侍乃
春の風ふ乃ふ乃ハ月の乃こ
侍丁乃柳乃れき春乃絵乃

梨山

其白　止雀
花暁　管鳥
ヤハタメ
古律　九山
斗流　竽喈
兎長　應美
岩クラ
自来　文鴛
之今
花光
百之亟　桃李
一佈　松花
曳尾　都雀
黒樹　呂鈴

未くたまた柳　ひろくろ　秋月
杉人　まこうつるる　梅のたまたま
鈴もこちら　姉あさうつ　ぬきう郎
古童　おこしもこ　もたたく　事　漢
蕣　乃　種　手　飛　ものの　もてる　山陽
割　うけ　春　遠　を　明　ものを
　　これ　作　の　星　なる
かくまるる　牛　な　拾　ひめ　春　月　冬
月　立　く　解　さ　ま　こ　し　梅　の　花
　　何　系　の　者　の　ふ　ぬ　ま　く
白　菊　や　妙　な　ふ　し　を　月　手　四
　　ま　こ　ま　ま　月　は　す　ま　こ　所

[illegible]
名月やほとゝぎすの[illegible]　月峰
屋根の[illegible]月[illegible]の[illegible]　志諺
[illegible]の[illegible]かゝやく　斗雪
名月や[illegible]の枠もとゞまらず　南空
晴山

[illegible]入り来　摂津
[illegible]　二柳
[illegible]の[illegible]　陀岳
[illegible]　青鯉
[illegible]　馬印
[illegible]　奇淵
[illegible]　旧國

今時[illegible]　丁江
[illegible]　宗晋
[illegible]　女之
[illegible]　柏庭
[illegible]　意水
[illegible]　竹斜
[illegible]　東尾
[illegible]　何丈
[illegible]　蜂友
[illegible]　魯隠
[illegible]　支國
[illegible]　文嬌

[illegible]　泊
伊丹
西宮

[illegible]

井眉
月村
鵞雪
桃水
亀水
兎舟
竹哉
蕉里
千呂
十左
五雀
仏芥

[illegible]

杜石
不覺
可策
西木
自樂
長齋
半輪
甘三
画凉
智西
其白
百菓

cij.usr/v YNW

[illegible]
我多恵ハ[illegible]千
春[illegible]
梶吉し新[illegible]
宣の[illegible]
[illegible]
月[illegible]
山寺や[illegible]
[illegible]
[illegible]
名月ハ一入[illegible]
[illegible]

文堂
鯉城
和幸
梶岳
歌知井
二毛
八千房
仙紅
其頑
梅司
女 田毎
つる

蕉門俳諧書林
京三条通寺町西江入ル
菊舍太兵衛